

従つて獨逸空軍がいづれは對英報復爆撃を行ふとしても、まだその時期ではなく、ロンドン空襲も繼續されるか否かには多大の疑問があつたのである。

一方ロンドン市民は米英當局のデマを丸呑みにして、獨逸空軍の再起するやうなことは絶対にないと信じてゐた。アメリカのラジオは獨逸航空機工場に多大の損害を與へたと、連日にわたつて放送、イギリスも新聞雑誌を通じて、獨逸空軍が月毎に弱体化してゐると宣傳してゐた。かかる樂觀的報道にまどはされたロンドン市民は、獨逸空軍の來襲を妨害空襲の一つと観、二、三回が精々で間もなく中止を余儀なくされると推測してゐた。しかるに一九四四年淺春のロンドン爆撃は、世界の豫想を裏切り、ロンドン市民の安易な夢を破つて、新鋭機と、新式爆弾と、新戦法によつて空襲毎に威力を増した。一月中に於ける二回の空襲で投下した焼夷弾及び炸裂弾が一千トシ、二月に入つて最初の一週間に六千トンがロンドンに降り撒かれ、全壊家屋は一月中に一萬二千棟、損害を蒙つたもの六萬棟に達した。

ロンドン市民は一月末の空襲を觀て、一九四〇年、四一年の大空襲の再現だと怖氣づいたが、二月に入るや「火災電撃」といふ新語で、獨逸空軍の猛烈な爆撃に戦慄してゐる。ロンドン市民に約十ヶ月間、敗戦近づく不安をひしひしと味はせた一九四〇年、四一年の空襲さえも「火災空襲」と呼んだ

ロンドン各紙が火災電撃と書き立てたことは、一九四四年春以後の空襲がいかにイギリス國民を脅やかしてゐるかを推測せしめるに足る材料であらう。しかも獨逸空軍は、單にロンドンのみを爆撃するのみでなく、サセツクス、ケント、ヘースチングス、ニューヘブン、フォルクスストーン、マンチエスクー等、一帯の重要地區を片つ端から爆撃して、その度毎に莫大な損害をあたへた。

イギリス當局は最初、被害地域に外國人を近づけず、極力損害を隠匿しやうとしたが、ロンドン全市至るところに被害を蒙るに至つて、その努力も水泡に歸し、遂に獨逸空軍の來襲に對する、市民の頑健な抵抗心涵養につくしはじめた。事實二月二十二日夜の大空襲の如きは、市中心部の窓より眺めて「どの方向も火の海だつた」とデーリー・メール紙は報道「獨逸空軍を輕視するな、爆撃は今後愈々激化して、損害は日と共に増加するであらう、事實獨逸機の來襲する毎に損害は擴大し、遂に獨逸機の損害がすくない點より見て、今後數ヶ月間、市民は相當の覺悟を要する」と論じてゐる。

米英の宣傳機關は獨逸空軍の弱体化を極力世界に傳へんとしたが、米英軍當局は獨逸空軍の底力を見透してゐた。一九四一年六月獨逸戰物發以來、ロンドンは一應空爆より解放されたが、やがて獨逸空軍の大舉來襲する日に備へて、全市の防空陣は刻々と強化されてゐたのである。しかるに一九四四年の獨逸戰爆聯合演習は、みごと高射砲隊の網の目の如き彈幕を貫して、ロンドン爆撃の目的を達しつ

つある。そこに一九四〇年—四一年と違つた。獨逸空軍の質の優秀性と、戦法の革新を觀る。

英本土よりリスボンに到着した旅行者の談話によれば、獨逸空軍は新式焼夷弾を用ひ、之が取扱ひを消防隊が知らなかつた結果、損害を一層大きくした。焼夷弾には一種の濃厚な液體が仕込まれ、水をかければ火力を盛んにする。よつて砂をもつて防火しやうとしたが、その準備が不充分だつたといふのである。ロケット爆弾、無人飛行機の操縦等、噂さのぼる獨逸の新兵器に、ロンドン市民は戦々兢兢たるものがある。事實チャザムの海軍工廠と築港の破壊、全潰したロンドン銀行と中央郵便局グリニッチの海軍病院と天文臺が吹飛ばされ、市議事堂が灰燼と化したのは、獨逸製爆弾の威力を示すものであり、重量爆弾四個で、相當大きな住宅集團四つともばらばらになつたと、外人旅行者は實見談を傳へてゐる。

その戦法もイギリスの慮を衝くものがあつた。一瑞典紙は獨逸爆撃機編隊は、風向きを利用してイギリス夜間戦闘機の追接を許さず、ロンドン上空を縦横に飛び交ひ、意の儘に攻撃したと傳へ、デーリー・メールの航空記者も「獨逸機はフットボールの如く風と共にロンドン上空に現はれる。郊外の一定地點で集結するや、高速をもつてロンドン上空をかすめ、爆弾を投下するや、極度の低空を海峽の彼方へ消え去る」と書いてゐる。ロンドンの週刊紙オブザーヴァーは、英防空陣の改造、強化を急

務とし「時速六百キロの高速と、八千米の高度をもつて現はれる獨逸機を、いかにして撃墜するかといふ新課題の前に立つたのがイギリスの防空陣である。」と論じてゐる。

八千米の亞成層圏近くより、急速に下降する獨逸機編隊に對しては、一九四一年式高度測定器では間に合はず、やむなく英軍部は新式機械をロンドンの至高射砲陣地へ配布したが、測定部隊は使用法を知らず、俄か透りの野營講習所を開いたといふ情報もある。新兵器、新戦法、新高速機で現はれる獨逸爆撃機編隊のロンドン侵入を、いかにして阻止するかといふ名案がまだ生れて來ないのが現状である。市民の窮狀は一九四一年春ごろよりひどく、地下鐵の各停車場は、婦人子供の避難者で溢れ、毛布一枚をかけ、地べたに眠る悲惨な一家があり、ニュース、クロニクルの報道によれば、ピカデリ一驛構内の如きは、新聞紙一枚も敷かず、眠つてゐる子供がある。獨逸空軍にロンドン大空襲の實力なしといふ政府の宣傳を信じてゐた丈に、市民の狼狽は一層狂的なものがあつた。

デーリー・メールに殺到した讀者の質問「獨逸空軍は引續いてやつて來るか」に對して、同紙記者は「やつて來るところか、今後愈々激化するであらう」と答へてゐる。ロンドン全市民はかくして日と共に憂鬱な顔をして來る。しかし之はイギリス人が敗戦主義にとりつかれた結果ではない。ベルリン市民が粘ると等しく、ロンドン市民もまた粘ることを知つてゐるからである。むしろ獨逸空軍の再

起によつて、侵歐作戦が遂行困難ではないかといふ危惧が、よりイギリス國民の胸底を曇らしてゐるといへやう。獨逸空軍のロンドン再爆撃は一月末開始されたばかりであるが、米英空軍のベルリン大爆撃は一九四三年十一月より展開されてゐる。従つてロンドンに比して、現在ベルリンの受けた損害の方が大きいとは言ふまでもない。しかしベルリン爆撃が、獨逸防空陣の強化によつて、その被害を刻々と減少してゐるに對して、ロンドンを爆撃する獨逸空軍の戦果が回を重ねるにつれて揚りつつあることは獨逸空軍の前途を卜する一つの鍵であらう。

ベルリン市民はすでに爆撃に對する精神的不死身性を獲得してゐる。今後いかなる大爆撃を受けても、米英の目標とする内部的攪亂も成功の餘地がないに對して、ロンドン市民は一九四〇年—四一年と格段の差のある一九四四年の爆撃威力に對して、未だ精神的訓練を卒業してゐない。一方米英空軍の凡ゆる戦術に應へて、獨逸が新機種を續々と生み、新戦法を編み出して、今日空からの國土防衛を完成の域に進めつゝあるに對して、イギリス防空陣は未だ混沌たる對策講究時代にあり、果して何時獨逸空軍の猛威を封じ得る新兵器、新戦法を發見することができるか見當もつかない。空爆戦に於ける獨逸の前途は明るく、イギリスの前途は暗澹たるものがあるのだ。

イギリス市民が下敷き一枚もない停車場に睡眠をとる時、ベルリンの野外劇場では高級なオペラが

開演されてゐるといふところにも、凡ゆる火線を超えたベルリン市民の精神的餘裕を見出すことができる。ロンドンの週間誌スフィアは、空爆下ベルリン市民の態度に感歎して「獨逸の如き強剛な國民は、空襲では絶対に参らぬ」と、ロンドン市民の狼狽に警告を發してゐる。瑞典紙シュワイツァーミッテルブレツセは「ベルリンの商業街は爆撃を知らぬが如く殷盛振りをみせ、科學的な研究は一層旺んとなり、勞働と交通にも大なる支障はない。倒壊家屋の傍には假事務所が建ち、落つて事務をとる市民の姿を見て、その勇氣と明朗さを稱さぬ外國人はない」といふ特派員の報道を掲載してゐる。

獨逸防空陣は漸次米英機のベルリン近接を許さなくなつた。三月四日ドゥリツトル指揮の下に、ベルリン友誼を目標して來襲したアメリカ機編隊は、ベルリン郊外四十キロのマルク・ブランドルブルグで追拂はれ、村落に放弾して遁走した事實があり。三月六日にはアメリカ空軍白晝の來襲を先づオランダ沖で激撃、戦闘機を急速に集結して進路を妨げ、編隊の側面で護衛中の、米戦闘機の間隙を縫ふて爆撃機を襲ひ、一萬米の上空でも、米編隊を眼下にして護衛戦闘機と空中戦を演じ編隊を崩した結果、アメリカ爆撃機の一部が散り散りに目標地へ到着した。この一戦で獨逸空軍は百八臺の米機を撃墜し、ムスタング、ライトニング等アメリカ戦闘機中の俊秀も施す術がなかつたといはれてゐる。獨逸防空陣は米英空軍五ヶ月の盲爆の試練を経て、今や斷じて敵機の氣儘な行動を許さぬ域に達した

のである。

しかし米英は西歐侵入作戦を成功させるためにも、歐大陸の内部を擾亂せんとする心理戦術の必要からも、今後愈々空爆戦を激化せしめんとし、獨逸もまた「之までの英本土爆撃は軍事目的の破壊が目的であり、米英の殺戮爆撃に對する眞の報復爆撃は之からだ」と掲言してゐる。かくして獨逸空爆戦は今後激化の一路を辿り、各々國力を傾けて展開される可能性があるのだ。

第二章 強力第二戰線結成の検討

一、西歐侵攻は果して何時か

米英が神經戰略によつて歐羅巴大陸を擾亂し、空襲によつて獨逸の工業力を叩き、短期決戦を焦りつつあることは上述の通りである。が同時に米英兩國は神經戰を最も有利に進行せしめ、謀略の實を擧げんためには、歐羅巴大陸に侵攻するが如き擬勢を常に持してゐなければならぬ。一方米英にして神經戰略の遂行遲々として進まぬ場合もまた、強力な兵力を送つて大陸に獨逸と雄雄を決しなければならぬ。かくして米英が喧傳しつつある西歐第二戰線の結成は、虚實の駆け引きを織り込んで神經戰

の武力的背景として微妙なる展開をみせんとしてゐる。米英軍の歐羅巴大陸侵攻作戦は愈々切迫した。一九四四年が決戦の年であるとは、樞軸、反樞軸の凡ての參戰諸國首腦部の高唱するところ、第三國専門家もまた、今次大戦が第六年目に入つて、決戦段階に入つたことを冷靜に認めてゐる。しかも一九四四年の年明くるや否や、歐羅巴戰局は俄然急調を帯び、ソ聯第三次冬季反攻戦の熾烈なると共に、大陸西部沿岸要塞を窺ふ米英軍の體形は、將に整はんとするかに見える。

アメリカ軍首腦者は「今後數ヶ月間に五十萬の兵を犠牲とする大軍事行動を起す」と言明した。米英侵歐軍最高指揮官は米將アイゼンハウアーと決定、その下にスパーツが坐り、イギリス軍總司令官はモントゴメリーとすでに正式に發表されてゐる。それどころか侵歐聯合軍兵力の内譯は、アメリカ七に對してイギリスが三とまで決定した旨放送された。「何故にイギリスの二倍以上の兵力をヨーロッパに遠征せしめて、尊い血を流さねばならぬか」といふ質問に答へて、ルーズヴェルト大統領は人口の比率によるものであると國民をなだめてゐる。上陸用舟艇が晝夜兼行、アメリカ東部造船工業都市で建造中であると報道されて既に久しい。いかなる觀點よりするも、米英は近く上陸作戦を執行するであらうと觀るべきである。侵歐作戦に對する獨逸の準備は、フランス軍降伏の直後、一九四〇年夏以來整へられて來た。西部沿岸占領地帯に急行したトゥット工作隊は、先づ蘭、白、佛、丁、諸國の

既設要塞を利用して、獨逸式新要塞を、その間隙に點綴せしめ、急速にイギリス遠征の線を作つたが、其後第二次、第三次と補強構築工事を続け、重軽火器も送り込まれ、一九四三年末より四四年初にかけて、ロメル元帥が實地視察するに至つて、既に萬全の準備成ることを示した。ロメル元帥は戦車師團 對戦車重砲師團を特に詳細に視察して、警報演習、射撃演習も行はしめ、上陸米英軍必滅の確信を新たにしたいはれてゐる。

米英は上陸作戦遂行を公言し、獨逸も來政必滅を世界に約した。一九四〇年夏以來幾度か世界の話題となつた西部歐大陸沿岸が、つひに戰場となる日を迎へんとしてゐるのである。しかも米英は集結し得る最大量の兵員、兵器、艦船を動員し、獨逸は資材の山、築城術の粹、智力を絞つて備へてゐる。米英軍にして一度大敗を喫すれば、一九四三年中漸やく立直りを見せた戦勢は一瞬にして覆へり、獨逸にしてむざむざ敵の上陸を許せば、いかなる事態が起るかも知れぬ。ゲッベルス宣傳相は「敵にして上陸に失敗すれば、損失を補つて再攻撃するは絶望となる」と語つたが、米英はいかなる犠牲を拂つても西部沿岸要塞を破つて、歐羅巴大陸の心臓部を痲痺せしめんと狙つてゐるのだ。

山雨將にいたらんとして風樓に滿つるとも稱すべき緊張が、今英佛海峡岸の上にある。否山雨は一滴また一滴、既にしたたり落ちてゐる。一九四四年初頭ビスケー湾上に於ける獨逸艦隊の衝突、米

英偵察隊の上陸企圖、米英空軍の沿岸要塞襲撃等は、上陸作戦の足ならしと觀て表支へないのである。

一風至れば大雨は沛然と轟き、本格的四つ相撲が西歐に展開する。立ち上りの呼吸を圖る米英の形相を受けて立つて、しかも必勝を期する獨逸の殺氣、ともに國運の隆替を賭けて物すごいものがある。

上陸作戦は果して何時行はれるか、世界の軍事専門家は遅くも五月まで、早くば一、二月と觀た。米英は純軍事的に、上陸作戦を急ぐを不利とするが、政略的には遅延を許されぬ。ソ聯をして獨逸とできる丈長く戦はせ、獨ソ共にへとへとに疲れ、成功の確信が付き、ソ聯復興困難となるを見究めて打つて出るといふのが米英の肚であつたが、テヘラン會談の軍事取決めによつて、ルーズヴェルトとチャーチルは、スクーリン首相に「東部戦線と呼應して西歐より上陸する」言質をあたへた結果、絶對に上陸作戦を放棄し得なくなつた。今一つは米英共に國內に勞資の對立はしく、獨逸の戦力も年毎に増強されつゝあり、純軍事的立場からのみ行動するを許されなくなつた。

侵歐に利用し得る米英側の兵力は、一九四四年初頭三百萬と計算された。しかし特殊訓練によつて上陸作戦に適する兵力はその五分の一にも足りないといふのが第三國専門家の推定である。更に上陸作戦を決行せんとすれば、防衛軍の二倍を用意せねば成功の公算なく、その兵員中七割をアメリカ軍によつて構成せんとする場合、實戦の経験がない丈に、兵力は防衛軍の二倍を更に越さねばならぬ。

參戰以來急速に増強して、すでに一千萬近い陸軍兵力を持つと豪語するアメリカも、將校の不足、兵訓練の不充分より、今一ヶ年位は上陸を延ばし度いところであらう。しかるに政治的情勢は急速に一大軍事行動を要求するに至り、乘るか反るかの一戦をすでに覺悟したかに見える。

最高指揮官をアメリカに譲つたのは、イギリス側に上陸成功の確信のないことを示すもので、失敗すれば責任をアイゼンハワーとスパーツに負はせやうといふ狡猾な手だと推測する者もある。しかしアイゼンハワーとて凡將ではない。いかに最高指揮官になつた嬉しませざれだとして、相當の準備を整へなければ動かないであらう。すくなくとも一月一杯は兵力の移動集結に必要となる。ところが二月、三月は渡洋作戦に最も不利な英佛海峡の時化季で、先づ四月、五月が常識的に觀て上陸作戦決行の時とされてゐた。しかし米英は東部戦線の戦勢を注視して、戦後の歐羅巴に於ける政治的立場を考慮する以上、純軍事的にのみは扱はないであらう。

獨逸軍部の見解は、テヘラン會談によつて、ソ聯の大攻勢と侵襲作戦を同時期と決定したとしてゐる。對ソ戦を絶對守勢に轉換し、戦線を整理、柔軟戰術に出て、後退また後退を續けて、百ヶ師に近い精銳を東部戦線より引抜き、西、南歐に向けたのは、米英の上陸がソ聯の大攻勢と呼應して行はれぬといふ見解に出發してゐる。即ち東部にはなほ廣大な占領地域があり、ソ聯の進出も直接獨逸の戦

力を脅威しないに對し、米英にして西歐より上陸すれば、大陸の心臓部が危機に見舞はれる。従つて東部の敵はあしらへばよし、西部の新たなる敵は絶對に殲滅しなければならぬといふのである。しかるに東部戦線冬季戦が最も激化するの二、三月でその二、三月は大西洋の波荒く、自然的條件が渡洋作戦を困難にする。米英が上陸に利のある四、五月に入れば、東部戦線は泥濘季を迎へて、大軍事行動は起し得べくもない。六月以降となれば東西挾撃の惡條件はなくなるが、巨大な損失を蒙つて、死力を絞らねばあるソ聯は、米英が上陸延期を提案しても應ずるはずがない。かくして五月までには決行するであらうと何人も觀測したが、すでに半ヶ年を経過して米英軍は未だ腰をあげてゐないのである。

米英軍西歐上陸作戦の時期に關して、第三國専門家間には一層皮肉なる觀測を行つてゐる者がある。即ち米英が上陸を決行する時は一、ソ聯軍が東部戦線で獨逸軍防衛線を突破し、中歐へ殺到しはじめた時、二、ソ聯軍が最後の死力を絞る反撃に失敗して、戦力凋落した場合のみ、米英が危険を冒して渡洋作戦に乗り出すであらうといふのである。

獨逸軍は万全を期して、東西兩戦線の同時激闘に備へてゐるが、それは歐大陸を赤化と全權主義の再縛下より防衛せんとする重大な責任を擔ふ國の當然の準備で、テヘラン會談で決定した軍事條項中

に、ソ聯の總反攻と西歐上陸を同時期に決行しやうといふ申合せがあつたとしても、獨ソの共倒れを狙ふアングロ兩國の基本方策は變らず、ソ聯がいかん強力第二戦線の結成を強要しても、種々の遁辭を設けて逃げを打つであらうといふのである。しかし東部の獨逸軍に崩壊の兆あれば、歐大陸に米英の勢力圏を再建するために、西歐を軍事的に占領する政治的必要性が起り、ソ聯にして大反撃に預き、赤軍の危機をもたれば、獨逸軍の背後を衝かねば英本土が危ふくなる。第三國専門家の一部は米英の狡猾さを見究めてこのやうに推斷してゐる。

上陸時機が自然的條件と軍事的理由と、複雑な反樞軸の政治的脈引により推測し得ぬとすれば、米英空軍の西歐大爆撃が連続的に展開された時、はじめて上陸作戦の切迫を豫言するの外はない。米英侵攻軍最高指揮官アイゼンハウアーは兎に角、英總司令官モントゴメリーは、制空権を獲得せずして一兵も動かす時ではないからである。「陸戦も海戦も、凡ての戦ひは制空権の完全な獲得によつてのみ勝利に導くことができる」とは彼が常に論ずるところである。歐大陸の外部は今や完全な要塞と化して、奇襲上陸する餘地は全然なくなつた。嘗てはトルコを通じ、黒海岸よりルーマニア、ブルガリア方面よりする侵攻が奇襲と考へられた事もあるが、今日の歐大陸は外周悉く鐵の防衛線を布いてゐる。米英軍にして奇襲の間隙を大陸に發見し得ずとすれば、正攻法で堂々斬り込む外はない。近代戦

の正攻法は大爆撃にはじまる。従つてモントゴメリーの持説が注目されなければならぬ。

事實一九四二年暮、アメリカ軍の佛領北阿侵入より今日に至るまで、米英軍の侵攻は制空権の完全な獲得を前提として進められた。チュニチアよりバンテラリアへ、續いてシチリアへ、更に南伊へ、航空基地を歩一步推進して、徐ろに陸上軍を動かしてゐる。前大戦の西部戦線に於ける英佛米聯合軍が、味方の砲弾が横しよきの如く頭上をかすめて敵陣に降込まれなければ、一步も前進しなかつたと等しく、モントゴメリーは戦域上空に獨逸機のある限り前進の令を下さないのである。従つて米英侵攻作戦は、先づ歐大陸西岸要塞の防衛力を破砕すべく、沿岸航空基地に數百數千機の大爆撃編隊を次から次に繰り出して巨砲を雨下し、砲座を覆滅、獨逸豫備軍の集中を阻止するため交通網の寸断をも目指すと観なければならぬ。かくして未曾有の大爆撃戦が沿岸に展開された直後、渡洋軍はイギリス本土を出發すると斷定される。

しかしチュニチア、南伊侵攻は、アイゼンハウアーの正攻法のみによつて勝利をおさめたのではなく、前者はグルラン一派、後者はバドリオー一派の裏切りによつて二つの勝利を得たのである。來るべき西歐侵攻には米英が丸めらるべき奸將なき獨逸占領地帯へ、米英軍は自力のみによつて正攻しなければならぬ。

二、西部沿岸要塞の持つ防衛力

獨逸は米英の大軍をいかにして遣へ撃たんとしてゐるか、ロメル將軍の要塞視察以來鳴りを鎮めてゐる丈に、世界の目はいやが上にも集中する。西部沿岸要塞がいかに強固なものであるかは、ドイツ上陸作戦失敗より、最近の英偵察部隊上陸まで、丸一ヶ年半の間、米英側が全く手をつけなかつた點からも想像することができる。即ち一九四二年九月、一ヶ師團の英加聯合軍が、ドイツに於て僅々十時間で殲滅されて以來、反輻軸例は恐れをなして攻撃の姿勢を地中海沿岸に向けてゐたのである。コンマンド部隊は水邊作戦部隊として特別の訓練を受けたイギリスの精兵であり、渡洋作戦の尖兵たる重要任務を帯びると共に、沿岸要塞の強弱を打診し、潜水艦トーチカ、沿岸砲座の破壊を目的とする。一九四二年數次行はれたコンマンド部隊のフランス沿岸上陸は、その都度殲滅的打撃を受けたが、よく本國へ逃りついた兵によつて、要塞の防衛力に關する報告が行はれたことは疑ふべくもない。コンマンド部隊と共に米英側が、多數の密偵を放つて防衛内容を探つてゐるといふ情報もある。勿論重要地帯の眞の防衛施設が、米英側に判るはずはないとしても、その輪廓は判つてゐるかもしれない。しかも米英が今日まで西歐侵攻を躊躇したのは、米英に要塞突破の準備と自信のなかつたことを示すものである。獨逸の戦力を破壊する道は西歐上陸を最も近しとする。ノールウェー上陸企圖は論外としても、バルカン作戦もまた迂迴の道であり、イタリア作戦が獨逸を何等動搖せしめないことは、事實の示す通りである。犠牲の大、作戦規模の大、危険の大は勿論あるが、米英にして獨逸に決戦を挑まんとすれば、西歐に渡洋作戦する外はないのである。その乾坤一擲の大軍作戦を起す以上、米英も相當の確信を持ち、兵員、兵器、彈藥、給糧、上陸用舟艇の準備も成つたと要なければならぬ。

之に對して獨逸もまた、沿岸要塞線の完璧を誇り、來敵必滅の決意を高唱、特に實地を踏査したロメル將軍が、防衛の自信を深めたといふ以上、来るべき西歐戦線こそ、文字通りの死戦を展開すると推斷して誤りはない。イギリスが西阿軍司令官に就任以來、リビア、エチオピアのシーソーゲームでロメル軍と戦ひ、輻軸軍との實戦の経験を最も積んだモントゴメリーの對歐侵攻英軍司令官にあげたに對し、獨逸が一九四四年の勢頭、モントゴメリーの宿敵として、同じく米英軍との戦闘に最も深い経験を持つロメル元帥を陸軍總司令として西歐に登場せしめたのは、我等に畏懼を覚えしめる。病のためチュニジア戦の途中、本國に歸つたロメル元帥は、バルカンに現はれて急迫せる南東歐の防衛に指揮をとると噂されるとみる間に、パドリオの裏切りによつてイタリア戦線危急を告ぐる

や、北中伊に委を現はし、米英軍のイタリ―北上作戦が停頓すると、今度は風雲はしき、西歐に登場した。對米英作戦に關してヒトラー總統がいかにロンメル元帥の鬼謀を買つてゐるかを示すものであり、自ら防衛陣の強固さを現た元帥が北阿に於て獨伊混成の僅少な兵力で散々英軍を蹴弁した奇略を傾け、本國間近くに大軍を驅使、いかにして宿敵モンゴメリ―軍を撃たんとするかは、豫想される西歐決戦の血しぶきに一服のロマンチズムを注入する。

ロンメル元帥が實地踏査によつて、いかなる點より上陸軍殲滅の確信を得たかは勿論現知すべくもないが、相つゞ新築、補強、改築によつて、今日の西部沿岸要塞線がいかに強固なものであるかは凡その見當がつく。一九四四年勢頭獨逸軍が發表した数字によれば、ノールウエー北端より、西佛國境まで四千五百キロの長大な要塞線は、重砲七千七百、對戰車砲三千の火力を有し、要塞障地は千餘ヶ所、水邊に撒かれた機雷は數百萬となつてゐる。人類が精想し得る最大の要塞であることは、その數字からも當然首肯することが出来る。米英軍の上陸作戦を阻害するものは第一に機雷である。一獨逸紙は「一般に想像される米英軍の上陸は、數千の上陸用舟艇が軍隊を満載、戰車、火器を積んで、一直線に海岸に乗りつけ、忽ち數萬の兵員が沿岸に橋頭堡を構築占領地域を一哩また一哩と擴大して數十萬の揚陸を終り、本格的侵攻行動に入るといふにあるやうだ、しかし現在の歐羅巴沿岸は、海岸前

哨地の強力な空軍の活動と、沿岸防備砲によつて、渡洋軍は十字砲火を浴び、敵が、いかに強力な兵力を一點に集中してもそんなに簡単な揚陸は許されない。特に沿海を埋める機雷こそは、渡洋軍が最初に打つつからねばならぬ一大障害となるであらう」と報道してゐる。

今次大戦に於ける機雷戦は、前大戦よりも遙かに大掛りに展開されてゐる。獨逸輕艦隊が、テムス河口に強行布設し、空軍は重要港灣へ空中より投下、威力ある攻撃武器としてイギリス艦船の移動を阻み、損害を與へつつあることは既に何人も知るところであるが、防禦武器としては北海、地中海、英佛海峡等至るところに機雷原が設置せられ、米英軍の上陸作戦は先づ機雷をいかに處理するかといふ問題から検討されなければならぬ。一獨逸紙の報道によれば、沿海機雷原は數哩の縱深を持ち、重要港灣、河口、三角洲等、敵が揚陸に便利な地域の沿海は數十哩の厚みで機雷に蔽はれ、敷設海面は輕艦隊不斷の活動によつて、常に變更、米英側の探知を許さないやうにしてゐる。

機雷原を突破して大陸に迫りつくために、米英は平底の上陸用舟艇を使用して觸雷を避ける方途に出る外はない。之がために上陸用舟艇は海岸より遙かに遠くで母艦を捨てる必要があり、大西洋の天候が上陸の機會をすくなくする。更に上陸用舟艇が兵員は揚陸しても、兵器、彈藥、食糧の補給まで平底舟艇で行ふことはできない、従つて巨大な消耗を必然とする西歐侵攻軍の必要とする巨大な物資

と後継部隊を普通船で補給するためには、巨大な海面を掃海しなければならぬ。一九四一年フィンランド湖に於てレヴァル軍港放棄を餘儀なくされたソ聯艦隊は、獨逸側の機雷敷設を萬々承知して、萬全の警戒掃海措置をとつたが、出港に際して殆んど艦隊が機雷、大打撃を蒙つてゐる。艦船が沈没してしまふれば機雷原の所在が判明しないところにも米英軍上陸作戦第一の悩みがある。

かくして獨逸は、沿岸要塞前哨の防禦威力として、數百萬の機雷をばら撒いたのである。米英艦隊は大陸沿岸に近づくに際して、先づ大量を喪失しなければならぬ。

續いて待ち設けるものは沿岸に七千七百の砲であり、數萬、數十萬の中小口径砲であり、無数の機雷である。西部沿岸要塞の火力に於いて、最も注目されてゐるのは新式重砲數千の威力で、すでに實地性能試験を終り、艦船の撃破と、敵空軍の撃墜に恐るべき實力を持つてゐることが確證されてゐる。新式重砲といへども海邊に放列を布く限り、海上よりする攻略は困難であるとされてゐた。既にロン・ドンに直接砲撃し得る超長距離砲を持ち、ドーヴァー、その他の海峡岸英國重要都市に直接巨砲を浴びせつつあるドイツの火力が、更に新式を誇る巨砲を加へた以上その威力は凡その想像がつく。

渡洋作戦軍の先陣は極密の裡に西歐へ近付くことが出来るかも知れないが、第二陣、第三陣はドイツ軍の知らぬ間に英佛海峡を渡る譯に行かない。數十、數百萬の大軍が一舉に渡洋することは技術上

困難であり、たとへ大陸に近接しても共に揚陸すべき施設がない。海峡上をうろつけば長大な射程を持つ巨砲が狙ひ撃ち、第一陣と第二陣に間隔を置いて米本土出港を待つて爆撃されるのは必定である。この場合ドイツ偵察機は重砲陣の目となつて協力すべく、僅々十數隻の米英護送船団が、英本土寄りを航行しながら獨逸長距離砲の餌食となつた數次の先例より觀て、來るべき西歐決戦に沿岸要塞の巨砲が占める戦略的地位は高い。

新式沿岸重砲は敵空軍編隊の攻撃に對しても特殊の使命を持つてゐる。即ち米英爆撃機の密集編隊に榴弾を撃ち込み、編隊を分裂さすからである。新式重砲は高射砲の如く、敵機撃墜等の直接的攻撃力を目的とはしないが、編隊によつて強大な防禦力を持つ米英爆撃機激撃を不利とする獨逸艦隊に、編隊を破壊して各個撃破の機會を與へ、間接的に防空陣に参加する。既に一九四四年初頭、西部沿岸要塞に近接せんとしたアメリカ重砲機編隊は、二十キロの遠くより獨逸新式重砲の榴弾猛射を浴びて四機を撃墜され、編隊を解いたところを驅逐機に追はれ、その僅道走した事實がある。その直後英佛海峡上空で米機の救助信號が頻々と發せられた事は、獨逸重砲の齊射が單に四機を撃墜したのみに止らず、多數の米機に痛手を浴びせたことを物語る。機雷原を突破し、重砲の巨砲も滑り、西歐の海邊に迫りつゝいた上陸軍は、中小口径砲や火砲放射陣地の壕によつつかる。戦車壕は至るところに埋ら

れ大軍の揚陸に便利な地域は數十哩の深さを持つ地雷原となつてゐる。獨逸紙の報道によれば、地中海沿岸に於ても歩兵一ヶ師團の防衛範圍に、一工兵大隊が敷設した地雷は一萬二千五百三十二個の多きに達したといはれてゐる。防衛線構築着手以來日なほ淺い南歐にしてかくの如く多數の地雷を埋めてゐるとすれば、四年間の歳月を費し、米英渡洋作戦の可能性遙かに多い西歐沿岸は、より地雷密度を高くしてゐると觀るべきであらう。

用意は出來た、獨逸は絶對殲滅の確信を堂々と述べ、米英もまた、五十萬將兵の喪失を覺悟して西歐の堅壁を抜かんと豪語してゐる。犠牲の大小は既に問題の圏外となつた。機雷、重砲、火焰、機銃、鐵條網、戦車壕、地雷の堰を突破する爲には、米英は明らかに五十萬はおろか、百萬青壯軍の血を流す覺悟を定めてゐる。その巨大な犠牲によつて、果して強力な第二戦線を結成し得るか否かが問題として残るのみである。

三、上陸軍殲滅を狙ふ獨逸の三段構へ

歐羅巴西部沿岸要塞を突破して、樞軸戦力の中樞たる、中西歐工業中心地撃砕を狙ふ米英の侵歐作戦は、アイゼンハワーを最高指揮官として將に遂行せんとしてゐる。之に對して獨逸が三ヶ年半

の長日月と、數百、數千萬の勞働力、最新鋭武器大量を注いだ四千五百キロの要索線に據つて激撃體形を完成してゐることはいふまでもないが、萬一米英軍の一部が上陸に成功しても、之に對する撃砕の準備また成つてゐることは、一九四四年初頭、獨逸首腦部によつて語られたところである。

思ひつきの奇襲や、中小國の軍事行動と違つて、來るべき米英の西歐上陸作戦はすくなくも三、四百萬の兵力を行使し、米英兩國の運命を文字通りに賭す一大作戦計畫である。奇襲部隊の上陸作戦は、失敗の揚げ旬全軍が撃滅されても主力に影響がないが、大作戦の傷痕は容易に癒えるものではない。特に來るべき渡洋作戦の如きは、米英がすくなくも五百萬トンの船舶を集結し、五百萬の兵を動かす、保有する重砲火器、戦車、空軍等新鋭器の悉くを吐き出す乾坤一擲の大軍事行動である。終局に於て敗退するとしても、すくなくもその一部は歐大陸の一角に迫りつくだけの確信はあると觀るべきであらう。獨逸が軍に沿岸要塞のみに頼らず、米英が上陸に成功した場合に處してなほ之を撃砕する用意を成すは當然のこととなしなればならぬ。米英軍はコマンド部隊の偵察、密偵の報告に基いて、西歐沿岸要塞の最も脆弱と目される地域を上陸地點に撰ぶであらう。四千五百キロの長大な沿岸が悉く同一の堅固さを持つてゐないことは更めて説くまでもなく、港灣、河口、三角洲等が重點的に強化されてゐることは敵味方ともに百も承知してゐる。米英が上陸地點として最も有利とする地域が強烈な

防禦と火力を持つて防禦され、防禦力の手薄と観られる地域は、米英が上陸を希望せぬところであるところに、どこを目標として渡洋するかが第一の重要課題となつて現はれる。

しかし近代戦は歩兵騎兵のみの揚陸によつて遂行することはできない。戦車、重火器の大量を揚陸しなければ、上陸軍は数時間にして殲滅されるであらう。特に歐大陸西部沿岸は米英軍の來襲を豫期して、大中小口径の火器を數段に繰らし、火焔放射陣地、地雷原を配し、至るところに裝甲兵團が待機してゐる。従つて米英は最高の裝備を持つ軍團をもつて、優秀な火器を上陸の一瞬より使用しなければならぬ。この場合問題となるのは重量兵器を如何にして揚陸するかといふ點である。即ち起重機施設の濶濶を先づ奇襲奪取するか、相當の水深ある海岸をみつめて起重機を搭載する船舶を利用するかのいづれかの途を選ばなければならぬ。單に重量兵器の揚陸に止らず、數萬の兵を一時に揚陸せしめ得る濶濶や水深ある沿岸は、四千五百キロの長大な歐大陸西海岸に於ても數へる程しかないと、米英參謀の苦心がある。

恐らく渡洋作戦は米英軍が數ヶ地點へ一齊に上陸を目指す行動となつて現はれるであらう。あるものは巨大な犠牲を覚悟して強烈なる防禦力を持つ濶濶、河口へ體當りの突破作戦を敢行すべく、あるものは防備手薄な地點へ揚陸作戦に出るかも知れない。之によつて強遠豫備軍の出動方向をまどはし

め、どの一點にても相當有力な部隊を揚陸し得ればよいといふ策に出るかも知れぬ。その場合一兵も揚陸せしめぬことの不可能たるはいふまでもない。

米英侵歐作戦成否の第一の鍵は、果して優秀濶濶の占領に成功するか、更にその濶濶、河口地帯に有力な橋頭堡を構築し得るか否かにある。米英軍從來の軍事行動も、先づ侵攻にあたつて常に濶濶の奪取を目指したことは、西歐作戦第一段階に於ける米英軍の方略を想像せしむるに足るであらう。

一九四三年のシチリア侵攻作戦に於て、米英軍が目指したものはマルサワとシラクスの兩濶濶であつた。即ちマルタ島を経てシチリア島の東南端パツセル岬に迫り着いた反輻軸軍は、ゲラ濶濶に上陸した軍と協力して一路シラクサ港の奪取に邁進してゐる。チユニスを發した一軍はシチリア島の西端に揚陸したが、之も目標は南下してマルサワ港を奪取するにあつたことは疑ふべくもない。イタリー本土に軍を進めるにあつては、カラブリア半島にレヂオ港を衝き、タラント濶濶にタラント軍港を、ナポリ東南方にサレルノ港を先づ奪取すべき行動を起した。來るべき西歐侵攻が、同じ手法によつて濶濶奪取を目的とする數ヶの軍事行動に始まることは火を見るよりも瞭らかである。

シチリア作戦は米英軍十萬前後を上陸せしめて第一次戦に入り、輻軸軍が撤退した當時さへ、その總兵力は卅萬前後に過ぎなかつた。十萬の兵員を揚陸せしむるにも一濶と二港の奪取を前提とした米

英軍が、數百萬の大軍を大陸に送り込まんとする大軍事行動に、一つの河口、一つの港灣も狙はぬはずはない。むしろ數ヶの港灣を是が非でも手に入れようと、莫大な犠牲を覚悟する數ヶの作戦が併進されると観る方が至當であらう。その一戦に米英兩國が運命を賭し、歐羅巴戰を終結せしめんと意圖すれば、米英は必ずや尤大な戦力を西歐沿岸に注入するを惜しまぬであらうし、一港灣、一河口が奪取される事もあり得るとしなければならぬ、問題は米英が奪取せる港灣地區よりどの程度の速力で兵員を揚陸し、どの程度の強さを持つ橋頭堡を構築し得るかに移つてゆく。

シチリア作戦に於ける米英軍の相手方は、その後米英に降伏したバドリオ一派の息のかかつた將校に率ゐられるイタリー軍であつた。カラブリア半島上陸作戦は、バドリオの降伏調印と期を同じくし、サレルノ灣上陸作戦に至つては、バドリオとアイゼンハウアーの馴れ合ひの下に行はれてゐる。従つてシチリアに上陸した米英軍は、殆んど無抵抗で目標とするマルサワ、シラクサ兩港を手中に納め、獨逸軍と遭遇してはじめて戦闘に入つたとは、英國一記者の報じた通りである。沿岸の防禦も殆んど施してなく、守備イタリー軍は獨逸製新式兵器の操縦も完全とは知らなかつた。米英は欲するが儘に優秀港灣を占領、望むが儘に作戦據點を擴大することが出来たのである。

シチリアに於ける樞軸軍の兵力は米英の五分の一に過ぎず、その間イタリー將校の腐敗によつて、一

度以上陸軍の敵として戦つたのはヘルマン・ゲーリング戰車師團を中樞とする獨逸の四・五師團と、愛國的イタリー軍の極少部分であつた。カラブリア半島、トラント灣岸にあつた獨逸軍は、米英とバドリオの陰謀によつて攻撃破壊されんとし、米英の上陸を阻止し得る兵力のなかつたことはいふまでもない。一方シチリアの地勢は獨逸軍の増援を阻んだ。しかし歐大陸西岸はシチリアやイタリー作戦と防禦條件を完全に異にしてゐる。橋頭堡の構築は勿論、港灣の占領もむざむざとは許さないものがあるのだ。

シチリア、イタリー南部作戦に於ける米英軍は、最好の條件の下に上陸したものであり、来るべき西歐上陸作戦は、最悪の條件の下に遂行されなければならぬ。第一シチリア、イタリー南部はバドリオ、ロアツタの陰謀によつて防禦が完成してゐなかつたが、西歐沿岸要塞は史上未曾有の施設を連ねる長大、奥深いものである。第二にイタリー防禦戦が腐敗せるイタリー軍を中心として戦はれたに對し、西歐防禦にあたるものは悉く獨逸軍である。第三はシチリア、南イタリーに於て、米英はその得意とする水陸兩面作戦を有効に進行し得ると逆に、獨逸軍は輸送力不足のため兵の移動、増援に悩んだが、西歐作戦に於ける獨逸軍は最高の機動力を發揮し得る。

シチリアに於ける獨逸軍の移動は峻険な山に遮られ、鐵道は貧困を極め、メツシナ海峡は米英海空

軍に脅やかされ続けた。ローマ以南のイタリア本土は同じくよき道路を缺き、鐵道の輸送力も大軍を動かすに足りなかつた。しかも降伏の下心を持つバドリオ、ロアツタ一黨は獨逸側の要求を拒んで獨逸軍南下の邪魔までしてゐる。之に反して西部歐羅巴は道路の發達に於て、鐵道網の緻密さに於て世界にその類を見ず、獨逸本國より何時、如何なる地點へも、即到大軍を移動集結し得る地理的條件を備へてゐる。米英軍が今日まで侵歐を豪語しつゝ着手し得ない最大の原因は、沿岸要塞の強固さよりも、むしろ西歐の持つこの地理的條件ではあるまいか。

一九四〇年八月十日、エベン・エメール要塞に殺到した獨逸軍は、十日間で早くも英佛海峡岸に到着してゐる。その間世界最新式を誇つたベルギーのリエージュ要塞があり、前大戦で獨逸軍を苦吟せしめたセダンがあり、モベージ、リュージュアン、マリーリンの堅があつた。しかも四通發達せる道路網を造り、獨逸軍の機動力は英佛白聯合軍必死の抵抗を破砕して、僅々十日間でアルトア、フランドルの野に數百萬の反輻軸軍を包圍してしまつた。來るべき西歐侵攻作戰に於て、米英軍はたとへ上陸に成功しても、一の要塞、一の防壁も持たず、素裸で獨逸軍と戦はねばならぬに反し、獨逸軍は敵なき西歐を自在に駆け抜けて、上陸米英軍が橋頭堡を構築せんとする地點へ殺到しさへすればよいのである。

しからば獨逸は上陸軍を激撃すべくどれ丈の兵力を擁してゐるであらうか。第三國専門家は一九四三年夏以來獨逸は東部戦線より約九十ヶ師團を引抜き、イタリアへ廿ヶ師、バルカンへ卅ヶ師、西歐へ四十ヶ師移駐したと傳へてゐる。それ以前どれ丈の兵力が西歐要塞にあつたかは勿論判明しないが、四十ヶ師八十萬を加へた人的配備の規模の大きは推測に難くない。更に獨逸本國内部には七十ヶ師百四十萬の豫備軍ありとは、第三國の専門家の観測であると共に、米將ストロングも「獨逸が歐大陸中核に據する戦略的豫備軍六、七十ヶ師は、世界最優秀の裝備を持つ」と論じてゐる。上陸を試みる米英渡洋作戰軍を、獨逸は沿岸要塞によつて阻まんとしてゐる。しかもなほ上陸に成功する軍團があれば、橋頭堡の構築を前に進め、萬一港灣、河口を米英軍が占領、大軍團をもつて西歐に動かんとすれば、數百萬の防備軍に、數百萬の豫備軍を放出して包圍、ダンケルクの慘劇を再現せしめやうといふのが、獨逸三段構への勝利への構想ではあるまいか。

四、輸送船團の量と犠牲

米英の西部歐羅巴侵攻作戰を機として、獨逸が上陸軍を撃碎殲滅し、歐羅巴戦局を一大轉換せしめんとする準備と決意を持つてゐることはヒトラー總統、リッペンとロツプ外相、ゲッペルス宣傳相等

が、一九四四年初頭行つた演説によつて明らかである。戦局の轉換と同時に敗敵を追ふて英本土への急襲も考へられる。西南歐の軍を返して東部に注ぎ込み、ソ聯軍への一大作戦決行も想像されるが、それと別個に今一つ、米英軍の渡洋作戦をもつて、反樞軸海上輸送力の根幹を覆滅する絶好の機会と觀てゐることは、來るべき侵襲戦を検討するに當つて見逃す譯に行かない。渡洋作戦は巨大な船を要する。一九一七年前大戦の末期、バルト諸島攻略のため獨逸が一ヶ師團二萬三千人と、馬匹五十頭、大砲、彈藥、食糧を輸送するに當つて使用した船腹は十萬三千トン、一人當り七トン強であつた。今次大戦は前大戦に比して高率の機械を使用し、熾烈なる火力戦は彈藥の携行量をも必然的に増加す、隨つて兵員一人あたりの船腹所要量は九トン半乃至十トンに至るであらうとは一九四〇年—四一年頃の觀測であつた。然るに一九四二年暮アメリカ遠征軍の佛領北阿侵入にあつて、輸送指揮官が要求した船腹は一人あたり十二トン以上であつたといはれてゐる。今次大戦の進行するにつれて、兵器の改良進歩と共に、軍の機械化は急速に擴大され、火器、戦車の重量も漸増の趨勢にあり、十五萬、七ヶ師團の兵力は、一千門の砲、八百五十輛の戦車なくして近代の戦闘を行ふことは困難とされてゐる。アメリカが渡洋作戦に兵員一人あたり十二トンの船腹を必要とした佛領北阿は、裝備薄きフランス植民地軍の防衛する所で、ドルラン一派と連絡をとつて居たアイゼンハワーより觀れば

大なる抵抗も豫想されなかつた。しかるに來るべき侵襲作戦に於て米英軍が上陸せんとする地點は、史上未曾有の強大な要塞に、一九四〇年ダンケルクに英佛聯合軍を殲滅して以來、四ヶ年間の歴戦の勇士を配してゐる。激撃の構への物々しき、配備された機甲兵團の量等を勘考すれば、兵員一人あたりの所要船腹は十二トンを更に越えると觀なければならぬ。しからば米英は渡洋作戦に幾許の船腹を準備するであらうか。第三國方面では少くも五百萬トンの船腹を用意せしめて、西歐大陸に一指も觸れることは困難としてゐる。一九四二年マダガスカル島侵襲作戦で、イギリス軍が南阿聯邦軍を輸送するに要した船腹は僅かに百五十隻、三十萬トンであつたが、準備に三ヶ月を空費した。その十六、七倍にあたる巨大な船腹が簡単に集め得るものでないことは更めて説くまでもない。しかし一九四二年のイギリスと違つて、今日の米英は相當の船を動かす得るであらう。急速造船によつて一航海で鉄が緩むといはれる標準型のボロ船ではあるが、アメリカが毎月百萬トン前後を進水してゐると推定して大した誤りでなく、アングロ兩國の運命を賭す一大軍事行動とあれば、ある程度の一級海上輸送を犠牲にもするであらうからである。

問題は五百萬トンの船腹をもつて、一人あたり十二トン、最低に見積つて十トンを必要とする、三百萬乃至五百萬の上陸軍を、いかにして英佛海峡を渡洋せしめるかにあり、之を迅速より觀れば、願

つてもない絶好の機会を利用して、米英船團をいかにして海底に葬むるかといふことになる。船舶の撃沈は満載する兵と兵器、彈薬を海底に葬るのみでなく、その後の反艦軸側海上輸送力に決定的影響を興へるところに、侵歐作戦に於ける海上戦の重大な意義がある。五百萬トンの船腹は勿論巨大であるが、之によつて渡洋せしめ得る兵員は案外にすくない。一人あたり十二トンとして四十一萬人強、十トンとして五十萬人、五百萬トン一千隻の船舶を横づけにし得る港灣のあり得やうはすはなく、假に一齊に分散渡洋するとしても、十ヶ所を狙へば四、五萬人、二十ヶ所に揚陸すれば精々二萬人となる。しかも實際問題として五百萬トンの船舶に同時に兵員と兵器、彈薬を積んでイギリス本土を出發するといふことは、機密保持の上からも、港灣の積荷施設より觀ても困難で、恐らく數十萬トン宛英佛海峡上へ押し出し、歐大陸へ殺到するであらう。隨つて最初に辿りついた米英軍は、たとへ上陸に成功するとしても、大なる勢力であり得るわけがない。

恐らく米英軍は第一次輸送によつて上陸した兵員が、防衛軍の十字砲火を浴びて殲滅される前に、第二回の上陸軍を殺到せしめるであらう。第二回渡洋軍も勿論甚大な打撃を蒙ることはいふまでもない。十數ヶ所に上陸地點を選んだとして、第二回、第三回の輸送船團が到着するまで、獨逸軍の援を支へ得るものが幾つあるか勿論判明しないが、五十萬の犠牲を前提とする米英軍の侵歐作戦は、

たとへ一ヶ所でも持ちこたへ得た軍があれば、そこに爾後の輸送力を集中して橋頭堡の構築と作戦據地の擴大を圖るは必定である。獨逸海空軍にしてこの場合敵船團の活動を見送れば、五百萬トンの船舶が英本土と西歐間を往復するに従つて、上陸する米英軍の勢力は増大する。この絶好の機会を捕へて、獨逸の租ふところは五百萬トン船舶の削減であり、全軍でなければならぬ。

米英の渡洋作戦を擁して、獨逸海空軍が敵船舶にどれ丈の損害をあたへ得るかには三つの前例がある。デイエツプ上陸作戦、シチリア作戦、及びサレルノ上陸戦である。三作戦で蒙つた米英船舶の損害は左の如し。

「デイエツプ」—上陸軍一ヶ師二萬人—撃沈、輸送船七隻—二萬二千トン、水雷艇二隻、驅逐艦三隻、監視船一隻、特務艦一隻、快速砲艦二隻、—大中破—巡洋艦五隻、驅逐艦四隻、輸送船五隻、一萬五千トン、快速艇十隻

「シチリア作戦」—上陸軍十四萬人(概算)—撃沈—輸送船六十一隻、二十九萬一百トン、巡洋艦一隻、驅逐艦七隻、コルツエツト艦三隻、外機動砲艦、小型艦艇多數—大中破—輸送船五十九隻、二十七萬八千七百五十トン

「サレルノ上陸作戦」—七ヶ師十四萬人—撃沈—巡洋艦四隻、驅逐艦五隻、水雷艇二隻、輸送船十

五隻、七萬五千トン、一中破一輸送船六十萬トン

即ち三作戦に於て米英は三十萬の將兵を渡洋上陸せしめるにあつて、巡洋艦五隻以下中型艦艇二十五隻、船舶八十三隻三十九萬トンを撃沈され、大中破された輸送船は八十九萬トンに達した。

三十萬の兵員揚陸に五隻の巡洋艦、二十五隻の驅逐艦等中型艦艇を喪失する割合を以て、三百萬大軍の渡洋作戦で海底に溺られる艦艇は、巡洋艦五十隻、中型艦艇二百五十隻であり、その他無数の上陸用舟艇、機動砲艦を空しくする。その重要問題たるはいふまでもないが、更に注目すべきは前例三作戦が教へる高率の輸送船沈没及び大破にある。即ち三作戦によつて喪失した輸送船は、撃沈率に於て兵員一人あたり一トン三分、撃沈及び大中破合すれば四トンに上る。かゝる輸送船の高率の損耗を重ねた前例は、三百萬兵員の渡洋を必要とする西歐侵攻作戦樹立の一大障害とならざるを得ない。

百萬トン船舶をもつて、西歐侵攻米英軍を輸送する場合、一人あたり一トンとすくなく見積つて十萬人を渡洋せしめ得る。この場合獨逸海空軍の攻撃による船舶の被害を、デイエツプ、シチリア、サレルノ三作戦と同率とすれば、沈没十三萬トン、大、中破二十萬トン、合計四十萬トンとなる。大中破二十七萬トンの中には、危ふくも被撃現狀で沈没は免れたが、歸還途中重損のため海底の藻屑となるもの、歸港はしても廢船の運命に陥るものもあるべく、殘部も數ヶ月間ドック入をして修理しなければ再び使用することは困難であると観なければならぬ。

兵員十萬人と所要兵器、彈藥、食糧を積載した百萬トンの船舶が基地に引返した場合、再び使用し得る船舶は僅かに六十萬トンに減少してゐる。即ち米英が侵歐作戦に準備してゐる船腹を五百萬トンと假定して、全船舶が一回宛渡洋作戦軍の輸送に従事し、再び本土の基地に引返した時、百萬トンは沈没または廢船、百萬トンはドック入りを要する損害を蒙り、殘るもの僅かに三百萬トンといふ計算になる。この間輸送し得た兵力は五十萬人で、勿論西歐沿岸に有力な第二戦線を結成することはできない。従つて米英は再使用にたへる三百萬トンをもつて増援軍を輸送しなければならぬが、第二回目的の兵員輸送力は船舶の喪失によつて三十萬人に減少し、第三回目的の輸送にあつては、船舶は百八十萬トンに減少、兵員輸送力もまた十八萬人となる。

獨逸海空軍にして、デイエツプ、サレルノ、シチリアの前例に觀る如き戦果を樹立すれば、米英軍は第五回の輸送を終つた時、殘る船舶は僅かに三十九萬六千トンといふ慘憺たるものとなり、渡洋せしめ得た兵力は百十一萬五千人で、西歐侵攻作戦に必要とされる最低兵力量、三百萬人の約三分の一にあたる。西歐の一角に迫り着いた米英軍は、來援を期待し得ずして孤立し、獨逸軍の鐵環下にじりじりと締めつけられ、全滅を待つ外ないのである。

之に對する米英軍の道は只二つしかない。一は數萬の飛行機を繰り出して英佛海峡上空を蔽ひ、獨逸空軍の輸送を封ずると共に、全艦艇を集結して獨逸艦隊を寄せつけぬこと、今一つは一般海上輸送を悉く犠牲にして、一千萬トン以上の船舶を渡洋作戦に放出、船舶の沈没、喪失を顧慮せず、ひたすら所要兵員の輸送を行ふにある。シチリア作戦に於てイギリスは、十萬の上陸に全艦艇の三分の一を動員してゐる。ソ聯側は西歐侵攻に米英が要する飛行機を五萬機と推算したのだ。その一戦にして獨逸を屈伏せしめ得る自信があれば、一千萬トン船腹の集結も絶對不可能といふことはできない。乗るか反るかの一戦とあれば、アングロ・サクソンにもそれ位の決断力はあると觀てよいのである。

西部沿岸上陸作戦が、いかに危険性を持ち、巨大な規模を必要とするかは、輸送船の面からも判明するであらう。米英にして一度頭けば、七、八百萬トンの船舶は一作戦にして沈没または大中破され反樞軸海上輸送力は根底より崩壊して、米英兩國の軍事行動はこの一點より制約され、英本土の物資危機は急速に破局への道を迫るであらう。海上輸送力は反樞軸勢力維持の命所であり、獨逸が潜水艦戦に力を入る理由もそこにある。しかも一九四三年四月以降通商破壊戦の戦果芳しからざる時、西歐作戦の展開切迫を傳へられることは、周ながらに數千隻の獲ものを至近の海域に誘ひ得るものといへる。獨逸海空軍は米英艦船の全撃、全沈を期して今英佛海峡の波濤を睨みつゝ待つてゐる。

五、制空權爭奪をめぐる大空中戰

イギリスに於て航空評論家として知られるオリヴァー・スチュワートは「モントゴメリーの作戦基調が制空權の奪取を第一とする以上、米英の西部歐羅巴大陸侵攻作戦は大空中戰に火蓋が切られるであらう」と論じてゐる。制空權が近代戰でいかに重要なものであるかは、今次大戦以前より識者によつて高唱されて來たが、落下傘部隊の整備、飛行機の改良進歩によつて、空軍は軍なる陸、海軍の補助行動より一つの作戰單位にまで飛躍、いかなる作戰といへども空中戰を前提とせざるものはないと言つてよい程である。しかも英航空評論家が來るべき侵歐作戦に於て特に制空權問題を論じたのは、モントゴメリー從來の言動及び豫想される空中戰が、未曾有の巨大な規模、未曾有の熾烈さで展開されるは必定とされてゐるからである。

近代戰闘を指揮する參謀、司令官にして、制空權を顧慮せざる者が一人でもあり得やうはずはないが、侵歐英軍總司令官となつたモント・ゴメリー程制空權を重視する者もまたゐない。防備施設と守備軍の戰意を缺いだシチリア、南伊作戦で、絶對的に上陸成功の公算ある場合にも、モントゴメリーは有力な航空基地を歩一步前進せしめ、絶對的に制空權を獲得してからでないとなし軍を動かさそうとし

なかつた。ましてや獨逸空軍基地多數を運んだ西部歐羅巴を窺ふ以上、モントゴメリーは一愈上慎重に空中戦の成行を凝視、制空権が完全に米英側の手に入らなければ渡洋の命令を發しないであらう。

一九四〇年の西部戦線に於て、空軍の大部分を精戦に叩き落され、英佛が惨敗が喫して以來、反軸の獨逸空軍恐怖症は重い。コヴェントリー、ロンドン、バーミンガム等、航空機工業上の重要都市を一九四〇年—四一年の連続爆撃で、獨逸空軍に爆砕されながら、死力を盡して被害工場を修理擴大に努め、今日の空軍を再建したイギリスの苦心も、平和産業を軒並みに軍需に轉換、實業界の反對も押して巨大な航空機工業を作りあげたアメリカの十二萬空軍計畫も、悉く獨逸空軍恐怖症に發するものであり、ダンケルクの惨劇を再び繰り返すまいといふのがモント・ゴメリーの制空権第一主義である。

敵前上陸は一定期間制空権を掌握せずして行ふことはできないが、西歐作戦は特に渡洋軍を上陸せしめる期間のみに止らず、米英軍が大陸より放逐されるか、殲滅されるまで空戦に優位を保持しなければならぬ。即ち上陸軍の携行する彈藥、食糧、兵器は、上陸直後數日間を支へ得る程度のもので、剛烈な防禦軍と激闘して數ヶ月間の大消耗戦にたへる丈の彈藥が、一時に揚陸される筈なく、戦車、火器等も續々破壊されるであらう。従つて揚陸完了の直後より、米英輸送船は常に英佛海峡を横断して消耗物資を補給しなければならぬ。シチリア、イタリア作戦では、米英軍一人あたりの補給物資は

一ヶ月間五トンとされてゐた。この割合で百萬人上陸軍のためには、一ヶ月五百萬トン、三百萬人では千五百萬トン、一隻平均五千トンとして、一ヶ月間に延べ三千隻の船舶が英佛海峡を往復しなければ、上陸軍に危機が訪れる。

僅少な物資と違つて千五百萬トンの甚大な兵器、彈藥、食糧を、一定の地域へ揚陸することは極めて困難である。大西洋の廣大な海面上でもよく英艦隊を捕獲攻撃する獨逸潜水艦は、狭少な英佛海峡で自在に獲ものを発見し得べく、輕艦隊列も猛襲するであらう。之に對しては米英艦艇を總動員して攻撃を封ずる途があるとしても、獨逸空軍の襲撃を阻止するものは米英空軍のみである。かくして西歐上陸作戦は制空権の完全なる掌握を絶對的に必要とするのである。

侵歐作戦を成功せしめるためには、米英は單に海洋コース及び上陸地點のみならず、歐大陸内部に對しても一定の期間制空権を獲得しなければならぬ。即ち歐羅巴中心部に待機する數百萬の獨逸戰略豫備軍の移動を封ずるために、鐵道、道路を破壊、沿岸要塞そのものを粉砕、兵舎、彈藥倉庫等、相當奥地にある軍事施設にも打撃をあたへぬ限り、軍の揚陸自體が不可能だからである。

渡洋軍に對して沿岸要素が威力を發揮し、その區域の擔當防衛軍で殲滅し得れば問題は無いが、有力なる重裝備軍團を上陸せしめ得た場合には、米英軍の作戦基地擴大速度と、上陸地點へ急行する

戦時豫備軍の集中速度が、西歐第二戦線結成の成否の岐路となる。ドイツ上陸作戦の一ヶ師二萬は、ドイツ防衛隊軍のみで僅々十時間に包圍殲滅されたが、數ヶ軍團が上陸に成功したと假定すれば、一地區の駐屯軍のみで防衛することは困難となるからである。米英はチヌエビア戦でシチリア海峡に艦艇多數と大空軍を配し、シチリア戦でメツシナ海峡を衝いて輻輳軍の増援を阻んだ。西歐作戦に於ては上陸地點と獨逸本國をつなぐ陸上交通路に大爆撃を行ふは明らかである。

しかし鐵道、道路の破壊を目的とする爆撃は獨逸戰國機の妨害によつて必然的に大空中戦を展開せしめる。

しかもトット工作隊を持つ獨逸は、破壊地點を忽ちに修理復舊せしめるため、米英軍は戰國機の妨害を豫期して矢張り早に爆撃機を繰り出さなければ、豫備軍の移動を阻止することはできない。シチリア、南伊と違つて四通八達せる道路網を寸断することは不可能で、いづれは獨逸軍が豫定の豫備軍を豫定の地點へ移すであらうが、問題は豫定通りの時間内に、米英上陸地點へ到着せしめ得るか否かである。沿岸要塞に對する爆撃は對空火力に優れてゐる丈に米英空軍に巨大な犠牲を拂はすであらう。特に大空襲を豫期して構築された丈に、ハンブルグ、ベルリンで武装なき非戦闘員を殺戮するやうな譯には行かない。

西部沿岸要塞は最新式要塞であるが故に、立體戦を目標とする要塞である。主要部分は鋼ベトンで對空強度を重視して作られ、潜水艦トーチカの如きは相當の重量爆弾をき返してゐる。彈藥庫、兵舎等は悉く地下に埋没され、勿論爆撃によつて潰される心配はない。砂丘の平和な沿岸風景のどこに剛烈な防禦力が潜んでゐるか疑ふ外はなかつたこと、西部沿岸を視察した一獨逸記者が記してゐる程、何もかも地下に設けられてゐるのが、立體的要塞の特色である。之に打撃をあたへ、大軍の揚陸を成功せしめんがためには、米英空軍大量が上空を制壓して、巨弾を雨と降り注ぎ続けなければならぬ。獨逸空軍が之に挑戦するも必定とすれば、こゝにも大空中戦は惹起される。

かくして米英は大空中戦で完勝し、獨逸機の近迫を許さぬためには、進んで獨逸空軍の基地を叩く必要が起つて来る。英佛海峡岸には數百の空軍基地が並び、重要港灣、河口、潜水艦トーチカ附近は勿論、至るところに巧みに自然を織り込んだ迷彩空港が築められ、特に海邊にあるものには悉く多數の戦闘機隊が待機してゐると傳へられてゐる。米英空軍は要塞、兵舎、彈藥庫、交通網を爆撃する前に、先ず獨逸空軍基地を破壊しなければならぬ。侵歐軍最高指揮官アイゼンハウアーに果してその確信があるであらうか。

歐洲戰局を通過して反輻輳軍は確かに空軍兵力に於て獨逸軍をしのぐものがあるかに見える。一九

四三年六月米英聯合空軍の大陸無差別大爆撃が展開されて以來その傾向は顯著である。同時に獨逸が開戦當時の如く空軍に於て反樞軸を壓倒すべく、ゲーリング元帥指導の下に異常の努力を拂ひつつあることもまた傳へられてゐる。しからば獨逸空軍がどの程度に擴充強化されてゐるかといふことが、侵歐作戦の前提をなす、獨逸對米英の大空中戦考察上決定的資料となつて来る。

第三方面の觀測によれば、獨逸航空機工業界が最近最も力を入れてゐるのは戦闘機の生産であるとし、一方では獨逸が對英大報復爆撃を執行するために、大量の新鋭爆撃機を蓄積してゐると傳へるものもある。獨逸首脳部もまた獨逸が、續々と青少年を航空兵に訓練中であり、航空機工業界も新鋭機の大量生産に必死であると言明、對英報復近きをにほはせてゐる。英航空評論家スチュワートは「獨逸は萬一の場合に備へて大量の飛行機を貯へ、兵員と機體の浪費を極力避ける方針をとつてゐると觀るべき節がある」と、イヴニング・スタンダード紙上で論じてゐる。米英軍専門家は「獨逸最近の空中戦に於ける受動的態度は、大空軍編成の途上にあることを意味するのではないか」といふ疑問さへ抱いてゐるのである。

空爆のみによつて勝利を得ることが出来ないことは、スペイン内亂當時の人民戦線派、一九四〇年—四一年獨逸空軍の連續爆撃下にあつたイギリス、現に米英の殺戮爆撃と戦ひつつある獨逸の證明す

る通りである。獨逸兩國の如くこの一戦を以つて興亡をかける強國同志の死闘に於いては、爆撃は却つて戦意をかき立てる反作用を起す。従つて獨逸は戰略的に無意味な報復爆撃を控へ、切迫せる米英の西部歐大陸侵攻に際して全航空兵力を放出、徹底的に米英軍を叩きのめす心算ではないかといふのである。事實一九四四年一月十一日には獨逸本土を襲つた米英機大編隊を百三十大豪撃墜して、一度遠征を決意した場合の獨逸空軍の威力を完全に發揮してゐる。獨逸空軍一月十一日の勝利は、地上砲火よりもむしろ戦闘機の大部隊によつて樹立されたもので、來襲機四百機中三分の一の百三十六機を撃ち墜し、その中には百二十四機が四發重爆が含まれ、乗員一千名を葬り去つた。墜落破壊した米英機は、大陸侵入地點よりブラウンシュウィク地方まで一つの線を成し、大戦闘機隊の猛襲に米英爆撃機の編隊は忽ち衝き崩され、上は八千米の高きより、下は地上二十五米まで搭載爆弾を放棄して逃げまどう米英機を追ふ獨逸戦闘機の量と戦意は「基地まで歸れると信じた者は恐らく一人もなかつたであらう」と運よく英本土に歸還した米空軍兵をして感歎せしめてゐる。この一戦は米英空軍首脳部にも衝撃を與へ、グラスゴー・ヘラルド紙の報道によれば、英空軍代辯者も「いざといふ場合獨逸空軍は恐るべき防衛力を發揮する」と告白してゐる。

制空権なくして侵歐作戦の成功なしとする米英は、數萬機を準備せずして西歐大陸を窺ふことは出

来ない。獨逸もまた制空權なくして西部沿岸防衛の困難なことを知り、非大な航空機を貯蔵してゐるとすれば米英軍渡洋の時に於ける上空戦は、その規模の大、その熾烈の度に於て凡ゆる戦争研究者の想像を絶するものとなるのではあるまいか。

四、心理攻勢を一蹴する歐大陸

一、歐羅巴内域の精神的結束

一九四四年二月二十四日、ナチス黨結成記念日にあたり、ゲッベルス獨逸宣傳相は剛烈なる必勝の信念を吐露して左の如く述べた。

「今次戦争は獨逸國民の生存のための戦闘であり二つの異つたイデオロギーの闘争である。凄惨、苛烈な今次大戦の特質はここに出発する。空襲に於ける獨逸國民の態度と黨の活潑な活動は、今次大戦史の最も光輝ある一頁となるであらう。防空陣は着々と強化され、對英爆撃も猛烈に展開されつつある現實は、獨逸が軍事的、政治的戦争指導に於て、再びイニシアチプを取るに至つたことを説明してゐる。大戦は漸やく決戦的最後の段階に達し、之に對して物質、精神的準備を完くすることは我等の任務である。危機こそは成功を容易ならしむる瞬間をもたらす」

ゲッベルス宣傳相の言明する如く、今次大戦に敗れて獨逸國家の存続も、民族の繁榮もない。存続す

るとすれば、ボルシェヴィズムの支配下に置かれるか、金權主義に縛りつけられた獨立なき國家である。従つてそこに殘存した獨逸民族は、共產主義またはアングロ・サクソン千年の擄取の對象とされなければならぬ。獨逸が東方より狂瀾の如く殺到するソ聯軍を血みどろになつて防ぎ、西方より来る爆撃機大群の盲爆下に奮ひ立ち、巨大な消耗と、重要都市爆撃の二重の苦難の下に、敢然として軍需工業力を擴充、強化して來たのは今次大戦に絶対に敗れてはならぬといふことを、國民の一人一人が頭に刻み込んでゐるからである。事實獨逸は狂暴なる米英空軍の彈雨の中から、みごとに再起してゐる。一九四四年一月末より展開された英本土大爆撃は、獨逸がつひに不勢を説して、再び東西兩戦線にイニシアチヴをとり始めたことを示唆するものではあるまいか。

米英の神經戰略は、獨逸に關する限り完全に効果がなかつた。前大戦の苦い經驗によつて、最後の瞬間まで絶対に武器を措いてはならぬと知つた獨逸軍は、つひに米英の凡ゆる謀略を誤解ばしてしまつたのである。バドリオ降伏當時の一變の危機、ハンブルグに次ぐベルリン大空襲當時の甚大なる損害等、米英が謀略、詭謀を織り交せて展開した神經的軍事攻勢の只中、獨逸に一の動搖、一片の不安もなかつたことは、獨逸全國民がいかに強靱な意志を磨いてゐるかを示すものであらう。

一方歐大陸全域を見渡せば、そこにも最後の勝利を目指して、獨逸と共に最後まで戦はうとする、

烈々たる闘志の溢つてゐるのを發見する。勿論獨逸國民が一米素れず、いかなる神經戰略にも感動もせぬが如く歐羅巴各國民が反樞軸に對して剛烈な敵意を燃やし續けてゐると斷ずるのは早計であり、米英の魔手は巧みに樞軸參加諸國にも伸び、占領地域に對する共產派の赤化工作と共に、一刻の漏斷もできぬことは更めて説くまでもないが、同時に歐羅巴大陸全體が、獨逸の勝利なくして平和も繁榮もないことを明確に認識し、親米英派擡頭の餘地がないことも事實である。

一九四四年三月、ドイツチエ・アルゲマイネ・ツァイトング紙は「歐羅巴大陸諸民族は、絶対に大陸住民の生存を守る必要に氣づいた。歐羅巴は斷じて個々に分裂してはならぬ。大陸の全力を傾けて一大戦力を確立し、反樞軸の神經戰略を破砕してのみ、歐羅巴は米英ソいづれへの隷屬よりも免れることができるといふことに氣づいた。事實獨逸は獨逸に史上かつてなき重大な任務をあたへ、歐洲のための歐洲を維持し得るか否かの瀬戸際に立つてゐるのである。従つて必然的に獨逸は歐羅巴の全力を、歐羅巴防衛目的遂行に適するやうに、大陸を再組織する責務を擔つた。今や全歐羅巴の都市と工場は、歐羅巴大陸防衛のために労働してゐる。樞軸の軍需工業擴充に参加することが、大陸と自國と自己の繁榮と平和のためであることを知つた證據である」と論じてゐる。歐羅巴大陸は今や急速に、獨逸を中心として精神的に結束、神經戰略に備へつつあるのだ。

戦前英佛外交に操られ、對獨包圍網の一環とまで觀られてゐたルーマニアが、今いかに強烈な樞軸陣營中の騎士となつてゐるかを觀れば、大戰物發以來、五ヶ年間、歐大陸諸國が、いかに精神的に變貌したか判明するであらう。一九四四年二月ブカレストのカピタラ紙は「獨逸軍がソ聯軍を阻止しない限り、歐羅巴の赤化は絶対に阻止することができない。萬一反樞軸が勝つても、米英が歐羅巴諸國がソ聯から受ける脅威を防いでくれるであらうといふやうな甘い空想は、ポーランド、及びフィンランドに於てとつた米英の措置によつて破れ去つた」と論じ、同じブカレスト紙バス・アラビアは「我々は結束して頑強に戦闘する。そして大陸の勝利のために凡ゆる犠牲をも拂ふであらう。萬一我々が英雄的抗戦によつて潰滅することがあると假定しても、斷じて奴隷の如く屈伏しないであらう。我等はベッサラビア、ブコヴィナ、モルダウ、及びルーマニアの寸土のために最後まで戦ふ」と、いかなる神經的攻勢にも耐へ抜かんとするルーマニア國民の壯烈な決意を示した。

フランスは大戰物發當時獨逸正面の敵であり、獨逸と併立する歐羅巴大陸内城の二大強國の一つで、昔佛戰爭以來獨逸に對する敵意の消えたことはなかつた。従つて一九四〇年單獨降伏して以來も、米英は内部を擾亂すべく必死の努力を傾注、共產黨もまた北阿を通じて赤化工作を續けてゐる。そのフランスもまたアングロ・サクソンの世界制覇の野望を見抜き、浸々乎たる共產主義思想の脅威恐るべ

きものあるを覺り、大陸共榮のために獨逸へ積極的に協力せんとしてゐる。一九四四年ラヴアル佛首相は、南フランス知事、警察部長と會同した際「フランス國民の生存を保證するものは獨逸の勝利のみであり、樞軸にして敗るれば、赤化は到底防ぐべくもない」とヴィーシー派官吏の對獨協力を促したが、三月には商業會議所會頭二十名の訪問を受けて同様趣旨の訓辭を述べ「フランスが當面するかも知れぬ最悪の場合とは、獨逸がフランスの無秩序に忍従し得なくなる場合であり、フランス國民の輕率な言動に、獨逸が怒る秋のみである。米英のフランス上陸近しといふ神經戰術に動搖する必要はない。獨逸は斷じて之を擊碎するであらうし、また撃滅し得る老大な豫備軍を保有してゐる」と、對獨協力の必要を更めて説いた。フランス内部にド・ゴール派が一人も存在しないと觀ることはできない。ラヴアル首相の訓辭が國民の輕舉を戒しめてゐる點からも、ヴィーシー政府の辛苦がいづれの點にあるか推測することは困難であるまい。しかし獨佛數百年の對立の歴史を回想する時、フランスの内部、特に指導階級が米英及び共產黨の凡ゆる神經戰術攻勢に抗して、斷乎獨逸を支持せんと努力してゐるのは果して何を意味してゐるか、即ち獨逸の勝利のみがフランス新生の運びであり、獨逸はまた勝利の實力をも持つてゐると信じてゐるからである。パリーのブチー・パリジャン紙は、米英軍の西歐侵攻作戰を論じて獨逸が本國と占領地に據する戰略豫備軍の危大さは、東部にソ聯と激闘してゐ

る丈に驚異に値する。兵器、弾薬も獨逸は數ヶ月間周到に用意、蓄積して何等の不安もない」と論じてゐる。

空爆による獨逸工業力の破壊、東部戦線に於ける大軍の消耗等、神経作戦の一つとして米英が宣傳しつづつあるものは、大戦勃發當時同一の戦列にあつた、フランス國民も信じやうとしないのである。歐羅巴大陸の外廓より、漸次樞軸勢力を切り崩さんとする米英の神経攻勢を、斷乎反撥しつづつあるものは、勿論永遠の繁榮と平和をもたらしものが、獨逸の勝利であるといふ大陸住民の自覺にあるが、一方に於て獨逸の有する強大な軍事的實力を、大陸諸國が知つて居ることもその理由の一つと觀なければならぬ。特にバドリオの崩壞以後示された、最悪の場合は獨力をもつて大陸を防衛してみせるといふ強烈な獨逸の意志と戦意は、歐羅巴諸國民に微妙な影響をあたへた。

歐羅巴内域に於ては、獨逸の周到な軍事的配備が行渡り、米英の謀略的活動を完全に封じ込んでゐる。

アメリカの魔手に陥つたドルランが、北阿に逃げ出して叛逆者の本質を現はしたのも、歐羅巴内域に於てはいかなる國家といへども、獨逸に反する行動を絶対に許されぬ實情にあることを示唆する。バドリオの裏切りはイタリー半島の突端に米英軍を上陸せしめたのみであり、アメリカ遠征軍の北阿

上陸は、獨逸の一兵もないモロッコ、アルジェーで行はれた。フリーロンにあつたフランス艦隊が、ドルランの出航命令を受けてゐながら、全艦隊自沈の運命に陥つたのも、歐羅巴大陸中部近くに於ては、米英のいかなる謀略行動も効果のないことを證明するものであらう。

獨逸が歐大陸内域を完全に抑へてゐることは、アメリカの將軍ストロングも認めてゐる。彼がアルゼンチン紙記者にあたへたインタビューは、獨逸の軍事力を讃嘆したとも稱すべきもので「獨逸の軍需工業労働者は一九三九年二千三百萬人であつたが、一九四三年秋には三千五百萬人に増加し、更にその背後には三億二千五百萬の歐羅巴大陸住民が控へてゐる。軍需資材の補給は満足すべき状態にあり、一九一八年の鐵鋼生産力は二千五百萬トンであつたが、今日では本國內で四千二百萬トンに達し石炭産出量は一國內で一億八千六百萬トンにのぼつた。ゴム、飛行機燃料も激烈な消耗戦を遂行するに足り、食糧も一九四三年の豊作で樂になつた。獨逸の恐るべき組織力は、歐大陸の支持を得て、精神的崩壞の如きは期待すべくもないと語つてゐる。一方反樞軸占領地域に於ける住民の困窮も、米英の神経攻勢をマイナスするものである。

佛領北阿が米英軍侵入以前、フランス本國をある程度援助したほどの農産物を生産してゐるにもかかはらず、住民が食糧難に悩むどころか、ド・ゴール派軍隊の給與さへ不足を傳へられ、イタリー南

部の食糧不足がすでに飢饉線上にあり、傳染病の猖獗で死者も殺出、正に社會生活の破局をみせてゐる等、米英の占領地域には常に住民の慘憺たる生活が展けてゐることも、大陸住民が詳細に知つてゐる。米英軍は口に解放を稱へつつ、その占領地域を壓迫してゐるといふ聲は、反輻軸陣營の内部にもあがつてゐるのである。かくして米英の歐大陸に對する神經戰略は、占領地域に描かれた米英軍の政治的失敗、歐羅巴各國民の自覺、及び獨逸軍の軍事的實力によつて敗れ去らんとしてゐる。しかし執拗なる米英は歐大陸侵入に不足する武力を、神經攻勢の併用によつて補ふべく、謀略活動を一層熾烈に展開してゐる。

二、内線作戰の利を知る獨逸國民

米英の神經戰略を粉碎して、獨逸國民が最後の勝利のために凡ゆる艱難に耐へてゐるのは、歐羅巴輻軸軍が今日守勢に立つといへども、内線作戰の利によつて、やがて戰勝が獨逸に有利に展開することを、全國民が信じてゐるからである。歐羅巴の戰場を圖とすれば、獨逸は圓周内に位し、米英は圓周外の點に位する。戰線が北阿にあり、ヴォルガ河畔にある時、歐羅巴の戰線は巨大な圓周を持つてゐたが、今や東部戰線は舊ソ連國境まで西へ移り、地中海戰線は中部イタリアに入つた。圓の縮少は、

その中心に位する獨逸の戦力を、圓周上に發揮するによき條件であるに對し、圓周外の點上にある米英が戦力を注ぐには次第に不利となる。昨冬ボルガ河畔に發したソ聯の反擊戰が相當の速力をもつてゐたに反して、一九四三年末以後の東部戰線が足踏み状態に陥り、ソ聯の消耗もまた増加する一方、一九四二年末モロッコ、アルゼリアに上陸したアメリカの遠征軍がまたたく間にチュニジアに殺到し得たに反し、サレルノ灣上陸の米英軍が、ナポリ攻略に豫定以上の時日を消費し、イタリア半島北上が牛歩の如き鈍重さをみせると共に犠牲の多きい理由はそこにある。圓の縮少は單に獨逸と戰線の直線距離を短縮したのみでなく、その實線距離を一層短縮した。獨逸本國よりリビア、エチプト國境までの直線距離は約二千キロであつたが、實線距離はその數倍に達し、三ヶ年にわたる輻軸北阿作戰の前線兵站據點トリポリより觀るも、エチプトまで二千キロの懸々たる軍輸送路を確保しなければならず、砂漠は熱風を呼び、機器は砂塵に蝕まれ、その軍需輸送の困難たるは言語に絶してゐた。しかもトリポリに達するまで、獨逸將兵と兵器、弾薬は交通機關の完備せぬ南伊、シチリアを抜け、海上勢力に優れるイギリスの妨害を排し、敵海空軍の要衝マルタ島の近海を通過して、地中海中央部五百キロを押し渡らねばならなかつたのである。ヴォルガ河畔への輸送路は北阿の熱風に對する寒氣、砂塵の苦惱をしのぐ雪と泥濘の兵站線を、ソ聯軍が退却に際して破壊した燒土の街々を縫ふて、獨逸

本國より二千五百キロの遠距離に布かねばならなかつた。

樞軸現在の戦線は内線作戦に最も適する地點にまで圓を縮少してゐる。イタリア半島の南部、バルカンの一部を除いて歐羅巴は世界に於て最も輸送力に恵まれた大陸である。鐵道は四通八達、自動車路は網の目の如く張りめぐらされ、水利の利用も高度技術によつて展けてゐる。南部の氣候は北阿の暑熱と比較すべくもなく、東部もヴォルガ、モスクワの前面程の寒さでない。更に今日を豫期して建設し、補修された現在の輸送力は、惡路と泥濘で知られる白ロシア、西ウクライナの交通路にさへ近代的相貌をあたへ、獨逸本國よりバルカン、イタリア、南佛へ向けて放射狀輸送路を築いた。バドリオの單獨降伏直後示された獨逸軍の迅速な配備、ドニエブル彎曲部に於けるソ聯軍の包圍、殲滅戦は、かゝる輸送力の大によつてもたらされたものである。

獨逸本國より現戦線に至る距離が殆んど直線的に實距離を短縮したに反し、圓周の短縮は圓周外の點に本國を持つ米英の戦力注入を極度に妨げてゐる。ソ聯が奪還地域を擴大すればする程、兵器、彈藥の輸送、兵員移動に交通路の乏しきを悩んでゐると等しく、北阿戰當時、モロッコ、アルゼリアに揚陸すれば足りた米英軍は、現在更に地中海の危險を冒して、良港に乏しき南イタリアまで海路を伸ばさなくてはならぬ。そこに米英船舶不足問題の解決が、反樞軸外線作戦上の重要課題となつて現は

れて来る。

圓周外の點に位する米英が、戦線へ戦力を注ぐために絶対に必要なものは船舶である。獨逸が圓周内の資源を直接線的に軍需工場地區に集め、兵器彈藥を再び直線的短路をもつ戦線へ放射狀に輸送し得るに反し、米英は第一に資源地帯を全世界に分散してゐるといふ不利があり、戦線への輸送もまた大西洋を越え、地中海を通る極度の迂路を辿らなければならぬ。

動力原料たる石炭についてアメリカは自國內の生産で賄ふことができるが、石油となるとすでに沿カリブ海諸國から海上輸送せねばならぬ。鑛物資源に見れば、銅はチリから、錫はボリビア、白領コンゴ、ニヂエリアから、ニフケルはカナダ、マンガンはソ聯、印度、バナヂニウムはベルー、南アフリカ、クロームは南アフリカ、キニールから、軍需必需資源たる重要金屬は、一部を西半球諸國より、一部を亞歐阿三大陸より、悉く船舶によつて本國へ運ばねばならぬ。イギリスに至つては石炭、以外は大なり小なり本土以外の地から船舶によつて輸送せぬ限り、一臺の飛行機、一發の彈丸も作ることはできないのである。

海外の資源を船舶の輸送力に持つ米英は、之によつて國內の輸送負擔を軽減することはできない。米英の軍需工場は海岸のみに存在せず、陸揚げされた原料と半製品は、陸上輸送力によつて工場に運

ばれ、生産品は再び陸上交通機關を煩はして海岸へ運ばなければならぬ。しかもアメリカ港灣より積出された兵器、彈藥と兵員は、危険極まる獨逸潜水艦の海を幾度か通過し目指すイタリー半島に近づけば、そこには樞軸空軍が空より襲撃の機会を狙つてゐる。戦線がその圓周を縮めれば縮める程、米英の海上輸送路は長大となり、危険の度は加はる。

商船隊の輸送力は積載力と、トン數と、往復の海上距離によつて決定される。開戦當時イギリス海運界は當時の保有船舶のみをもつて戦時輸送を完遂し得ずと聲明した。事實開戦直後より明確となつた海上輸送力貧困を補ふため、ノールウェー、オランダ、ギリシア船を詐謀または強制して反樞軸の用に供したのである。樞軸海空軍によつて三千三百萬トンの巨大な船腹を撃沈されながら、軍事輸送力の全面的崩壊より免れ得た因由は、その抑留第三國船舶の使用と、アメリカの參戰による全面的協力によるものであつた。強引な大商船隊建造計畫遂行と、一九四三年春以來獨逸潜水艦が不振期に入つたため、米英陣の海上輸送危機がある程度緩和されたことは否めない。同時に喪失せる三千三百萬トンの負擔は依然として米英にのしかかつて去らず、歐洲戦線の圓周縮少も影響して、海上輸送力不足の悩みは解消してゐない。

イギリス本土と歐羅巴大陸間を戦前一ケ年間に三十六往復した船舶は、アメリカ本土より東亞の戰

線に就航して、僅かに四往復し得るのみである。之を沿地中海戦線に送るにも、四回往復が精々となる。アメリカ本土に兵器の山を積んでも樞軸を屈伏さし得ずとは米海相ノックスの詠嘆であつた。海上輸送力のみが米英戦力の戦線注入を媒介する唯一のものであり、その輸送力が距離によつて徹底的に強弱を左右される限り、外線作戦の不利は現在、一九四三年春に比して遙かに大きい。

一九四三年四月獨逸潜水艦が不振期を迎へて以來、アメリカの船舶隊が緩和されてゐる事實を否定する事はできないが、海上輸送力の全面的崩壊の直前まで行つた苦悶が、一年や二年で解消すべくもないことも明らかである。特に地中海作戦を強行し、西南太平洋戦に腰を入れる以上、軍需用船の激増は避け得べくもなく、依然として米英に船舶不足が懸存してゐることは、イギリス本土の食糧事情からも觀ることができ、

獨逸潜水艦の沈黙ここに久しく、イギリス國民は食糧の増配を期待した。アメリカの商船建造量と樞軸海空軍による喪失量を比較して、専門家はすでに數百萬トンの船腹の餘裕が生れたはずだと計算した。従つて獨逸は勿論、オランダ、ベルギー等よりも劣る英本土の食糧割當では、當然大巾引上げを觀るであらうといふ風評が擴まり、食糧相ウィルトンも食糧の輸入が好調を持續してゐると言明した。しかし飢饉線に追ひ込まれてゐたイギリスの食糧が、少々の船舶増加位で四千七百萬の住民を潤

す程増加するはすはなく、戦線の擴大で事實食糧輸送へ餘剩船舶を割く餘裕もない。ついに一九四三年末に至つてウールトンは「イギリスの食糧状態は更に悪化すべく、大不足を見るのも近い。現在一週間に一、二志の肉が手には入る人は幸福といはねばならぬ」と演説してゐる。

外線作戦上に横はる米英の悪條件は、船舶問題より眺めて輕視を許されないが、今後假りに歐羅巴奥地に侵入し得ると假定すれば、兵站線は愈々長大となつて米英の戦力を弱化せしめる。しかも海上輸送は米英の優勢なる海上勢力の支持の下に行はれるが、大陸に入れば道路、鐵道を利用する外はなし。その陸上輸送の困難さは、イタリイ南部一切の交通網を獨逸軍に断ち切られて、米英軍が身をもつて體驗してゐるところである。歐羅巴戰の將來を觀測するものは、内線作戦の利が獨逸にとつて、地理上極度に高いことを忘れてはならぬ。

三、勞働戦線も極めて強固

一千萬の大軍を前線に派し、東部戦線に於ける犠牲も必ずしも僅少でないといふ計算されてゐるにもかかはらず、獨逸が米英空軍の猛爆下に危大な軍需生産力を維持しつづつある現状は、列國齊しく驚異とするところである。特に米英兩國が自國のみの勞働力を使用して勞働争議絶えざるに對し、獨逸が多

數の外國人勞働者を利用して、生産陣に微動もみせてゐないのは歐大陸が米英の神經攻勢に極めて強きことを意味するのではあるまいか。

アメリカには恒常的勞働争議がある。炭坑、鐵道、鐵鋼業をはじめ、航空機工業、埠頭勞働者等、戰事重要勞働者は繰り返し繰り返し紛争を捲き起してゐる。一九四三年末には、その内鐵道従業員及び鐵鋼勞働者の總罷業が破局に直而し、大統領ルーズヴェルトはクリスマスまでの週末休暇を中止してワシントンに歸つてゐる。鐵道争議は政府の最後の切札も國家接收の寶刀で危ふくも總罷業を免がれ、鐵鋼勞働者も爆發寸前に踏み止まつたが、之によつてアメリカ軍需工業力を脅やかす、勞働者の動搖がをさまつた譯ではなく、政府が強権をもつて臨んだ丈に、内面的にはより不満を醸成してゐる。

一九四三年末より炭業勞働者の動搖は鐵道、鐵鋼争議程目立たなかつたが、聯邦法曹協會に於ける講演に於て内務長官イワクスは「坑主と坑夫間の賃銀協定が纏まらなかつたら、炭業罷業再發は免れ難く、協調せしむる途も今のところない。もし坑夫の再罷業となれば、アメリカの石炭豫備が殆んどなく、採炭力もギリギリ一杯である丈に、罷業期間中中絶した採炭量は、その儘アメリカ全軍需産業の生産力を狂はし、後から補充する事ができなくなる。」と憂悶の吐裏をさらけ出した。一九四四年二月まで爆發までには進展しなかつたが、依然として熾り續けてゐる。

イギリスの労働争議はアメリカ程頻発してゐないが、戦時重要部面の不満は絶えず、ノッチンガムとダービーの炭坑夫罷業は、鐵道車輛不足と相まつて、一九四三年下四半期の燃料不足深刻となつて現はれてゐる。一九四三年十一月二十七日以前の二週間、イギリス本土の採炭量は前年同期に比して三百十四萬トンを減少した。一ヶ年を通ずれば千二百萬トンといふ巨大な採炭量減である。原因は人的資源の不足から、熟練坑夫を戦線に送つたといふ點にもあるが、炭坑夫の争議が最も大きな減炭素因であることは疑ふべくもない。デーリー・テレグラフ紙の如きは「如何に戦争の短期終結を論じても、石炭が不足しては實行困難だ、しかも日と共にこの傾向はひどくなる」と論じてゐる。

之に反して獨逸には争議の兆候さえも見ることができない。一九四三年十一月八日の演説で、ヒトラー總統は「勝利以外に何もものもないといふ、熱狂的、確信的行動を國民に要求し、銃後もまた「前線が勝利のため血を流し、今後幾世代にわたる國民のために戦つてゐる以上、我等が戦ひに必要な兵器彈藥を生産するために、苦闘するのは當然である」といふ意義に徹してゐるからである。前線の勇士が上官の命令に對して一の不満も持つてゐないと等しく、銃後の労働者は生産に關する命令に絕對服従するのである。更に獨逸労働行政の卓抜なる所は、歐大陸の軍需工業を一層安泰にしてゐる。

イギリス戦時經濟省スポークスマンは、獨逸の労働者が米英と違つて、一片の動搖も起さない理由

を労働行政の成功にありとし「歐羅巴で最も給養のよいのは獨逸産業従業員であり、イギリスの石炭採掘量が減少一途を辿るに對して、獨逸の石炭産額は、戦後急激に増加してゐる。特に開戦當時の炭坑夫が、現在も熟練坑夫として従業し、一人も兵に徴收されなかつた點は注目しなければならぬ。」と述べてゐる。

デーリー・メール紙も獨逸の採炭量増減を比較して「反樞軸空軍の猛烈な爆撃を受けたルール炭田が、現在も爆撃前と同一の出炭量を維持してゐる事實は、獨逸の労働行政を詳かにせずして理解することはできない。ナチスは炭坑労働者の一般生活、労働条件を引上げるため萬全の措置を執り、賃銀もよいが、食糧も十二分に供給、社會的授産にも申分がない。」と報道してゐる。イギリス労働組合長ワルター・シトラインも「労働者の天國であるはずのソ聯の労働者が飢饉賃銀に苦しんでゐる時、獨逸の労働者が恵まれた環境にあるとは皮肉なる現象であるとし、労働收入とその購買力に關する獨逸の數字を比較し、イギリス政府へ暗に反省を求めてゐる。

シトラインの發表した數字によれば、ソ聯飛行機工場に於て十一時間労働した賃銀は、一・四五ルーブル乃至三・六ルーブルとなつてゐる。他の軍需工業に於ては之より悪く最高三・一ルーブル最低一・一ルーブルである。ソ聯に於けるルーブルの購買價値は、獨逸の十ペニヒに相當する。之を獨

逸労働者の賃銀より割出せば、ソ聯労働者が冬オーバーを着る購入するために九百時間働かねばならぬに反し、獨逸労働者は八十三時間、即ちソ聯労働者は三ヶ月分の収入全部を投げ出して冬仕度するに對し、獨逸人労働者は八日間働けばよいといふ勘定になる。之を獨逸の優秀労働者収入より計算しても、ソ聯では三百六十時間、獨逸では五十六時間の労働で冬オーバーが一着買へるといふ段違ひの賃銀差が生れて来る。

獨逸が外國人労働者に對して、優遇を怠つてゐない事も、獨逸戰時産業界を動搖せしめぬ一因であらう。デウケル労働配置長官の言明によれば、獨逸は二十四ヶ國の外國人労働者を獨逸人と同等に扱つてゐる。一九四四年は決戦の年であり、現在軍需産業に従事する者を更に前線へ廻さねばならぬ事も考慮しなければならぬ。と同時に米英の老大な生産力と對抗し、之を追ひ抜くためには、所要労働力は一層擴大されるであらう。そのいかなる事態が起るも、いかに巨大な労働力を要求されても、びくともせぬ丈の労働力を維持するためには、外國人労働者の積極的協力が絶対必要となつて来る。

獨逸國內四十六ヶ所には外國人労働者の集合宿泊所が設置され、労働省の管轄下、労働戦線が委託されて經營してゐる。氣の利いた壁飾り、高級なラジオをはじめ、集會所には娛樂機關をたつぷり備へ、出身地域に分類して、郷土の香り高い厭立て食糧も充分に支給される。料理人も外國人で、新聞

も外國別に發行され、一宿泊所は千六百人乃至二千人を收容しこの集合宿泊所で一定の訓練を経た後分散、新しい職場に向ふといふ順序である。東部占領地域出身労働者が獨逸本國で働いた場合、住居費、食費を差引いて、一週間六十時間労働によつて四十マルク乃至六十マルクを貯金するといふのであるから、その賃銀の並々ならぬものであることが判る。

デイリー・エクスプレス紙は、獨逸を内部より崩壊せしめんとする米英の計畫は空しいと、ヒトラー總統を中心とする獨逸國民の結束の堅固さを指摘「ヒトラーの軍隊は激闘第六年に入つて、第五年目のカイザー軍と比較すべくもない旺盛な戦意を持ち、裝備、指揮ともに開戦當初より遙かに優秀である。米英は歐羅巴戰に於て恐るべき強敵と戦ひつつあることを、兩國民は忘れてゐるのではあるまいか」と警告してゐる。一九四三年末より一九四四年初頭にかけて、ヒトラー總統をはじめとする獨逸指導者は現在獨逸が直面しつつある苦闘を卒直に認め、しかも「最後の勝利を確信」してゐるのである。

今次大戰に於ける宣傳戰を觀る時、樞軸があくまで戰勢の真相を發表して、正々堂々最後の勝利を高唱するに反し、反樞軸が常に謀略的意圖をもつて、樂觀的觀測を國の内外に傳へてゐる興味ある事實に氣がつく。そこにも米英陣營の國內の結束の緩みと、樞軸側の必殺の氣魄を汲み採ることが出來

る。アメリカに類する労働争議が、かゝる樂觀的戰勢觀に煽られた戰勝氣構へに出發してゐることはアメリカの識者も指摘してゐるところ、しかも戦局の真相を發表すれば、次期大統領選に於てルーズヴェルトに勝算なく、老大な損失を認めれば、國內民心の動搖を招來するに現在の宣傳方針を變更することはできない。

一九四三年のクリスマスに行はれたルーズヴェルトのラジオ演説の如きは、ルーズヴェルトが獨裁的傾向を愈々濃化した現はれであると議會で紛議を醸し、スウェーデンの有力紙アフトン・ブラデツト紙のワシントン特派員は「殊更に議會を迴避して、軍隊に呼びかける形式をとつた降誕祭放送は、ルーズヴェルトの側近者をまで面喰はした」と報道してゐる。デーリー・メールもアメリカ國內問題は、一九四四年重大化する可能性ありとし「ルーズヴェルトが大統領に四選されたら、立法、行政兩部の腐敗は愈々激化して、流血の政治的混亂を來すであらう」と斷じてゐる。

敵米英が内部的に崩壊するであらうといふやうな、希望的觀測を行ふことは勿論許されぬ。戦争の責任者ルーズヴェルトも、世界統治の野望に燃えるユダヤの煽動によつて、アメリカ國民現在の日獨兩國に對する憎惡心は相當に根強いものがあり、イギリスに至つては、一九四〇年より四一年にはわたる獨逸空軍の大爆撃を齒を喰ひしばつて兎に角こらえ通す丈の粘りを持つてゐるからである。しか

し同時にそのイギリス内に於て、最も重要な戰時重點産業に罷業が頻發し、カナダ最大のニツケル鑛業會社、インターナショナル、ニツケル・コンパニーの社長が「採鑛熟練工の兵役を猶豫してくれなければ、減産避け難し」と、カナダ軍當局との間に縫れを起してゐる等、内部的に縫みをみせてゐるのである。更に「ニツケル生産設備を之以上増加しても、戦後は何にもならぬ」と自己の打算から、國家の要求する増産命令に反するが如き言説が横行するに至つて、自由主義がいかに近代總力戰の瘤であるかを今更に教へる。

アメリカは平和産業を戰時工業へ切替へることに確かに成功した。しかし平和時代の自由主義に甘やかされた國民の頭を、完全に戰時的に動員することには成功してゐない。労働者の罷業はその現はれである。樞軸國民が開戦以前より、臨戰的に精神訓練を終つて、大戦のさ中、いかなる不振な報道も受け入れて一分の動搖もない。米英は真相のすべてに蓋をしなければ國民を率ゐて行くことができないのである。そこに反樞軸の背後の脆弱點があり、米英が神經戰略に苦慮する焦慮が伏在する。

獨逸國內の結束が固い一つの基礎に、その食糧事情をあげることもできる。最後の勝利を獲得するために、戦後の強烈なる戰意の持續、前線の要求に應じ得る軍需品の生産、空邊に對抗し得る防空陣と共に、食糧を絶對的に確保しなければならぬ。腹が減つては戦さができぬことを、獨逸は前大戦

の経験により最もよく教へられてゐる。従つて今次大戦以前より農業に關しては特殊の計畫が樹立、遂行されて來たが、大戦第五年目に入つて愈々その効果を現はしてゐることは、決戦下獨逸の一大強味である。

パツケ食糧省次官は、一九四三年の農産物收穫は、開戦以來最大のものであると發表した。之を前大戦の終末一九一八年と比較すれば、左の如く格段の相違のあることを観る。

裸	麥	一九一八年	一九四三年
小	麥	六二〇萬噸	七四〇萬噸
大	麥	二二〇萬噸	四二〇萬噸
燕	麥	一九〇萬噸	二六〇萬噸
甜	菜	四三〇萬噸	五三〇萬噸
		七五〇萬噸	一六〇〇萬噸

即ち多數の青壯年を戦線へ送り、若大な軍需工業を運轉してゐるにもかゝはらず、獨逸の農村は前大戦當時に比して、小麦は八割二分、甜菜は十一割六分の驚くべき増收を記録してゐる。馬鈴薯も一千万噸の増産で食糧は全般的に前大戦中の收穫より遙かに多く、開戦前數ヶ年の平均量をも突破して

ゐる。穀物と共に採油用植物の收穫増加も目覺しいものがある。オリーブ果實は小麦、甜菜の豐作を遙かにしのぎ、菜種、海苔の作付面積は、開戦當時四萬六千ヘクタールから、四年目の一九四二年には三十二萬三千ヘクタールに大擴張された。一方バターの生産額は七十萬噸を突破して世界一を誇るアメリカの七十五萬噸に近づいた。新たに獨逸の保護領となつたベールメン、メーレンは、一九四〇年一四一年には大量のパン用穀物の供給を仰いでゐたが、一九四三年には逆に獨逸へ十七萬餘噸を供給し、ニスス、ロートリンゲン、オーバーシュレジエン、南シュタイエルマルク等は未だ自給の域に達しないが住民の努力によつて漸次獨逸への依存量を減少させてゐる。東部地方は開戦第一年、製パン用穀物十七萬七千噸の餘剰をみたのであるが、現在では八十二萬餘噸を獨逸へ送つてゐる。

獨逸が當面する事態は極めて重大である。東部に未曾有の消耗戦を展開すると共に、西南方面にも大量の兵器、彈薬を準備しなければならぬ。従つて軍需工業は巨大な従業員を要し、戦線は多數の青壯年を要求する。しかも開戦當時よりも数量ながら主要食糧の配給量を増加し、バター生産量がアメリカに接近してゐるといふ事は全獨逸國民が戦局の激化とともに戦意を燃やし、米英空軍の盲爆が激化すればする程、銃後國民が凡ゆる豫備勞働力を捧げて必勝の確信を固めつつ苦闘に敢然と乗り出してゐることを物語るものではあるまいか。

四、守勢より攻勢への氣魄

米英は勝利の確信なくして平氣ですでに勝てるが如く装ひ、敗色歴然たる場合にも、なほ勝機を握めるが如く豪語する特異の術を心得てゐる。一九一六年末獨逸潜水艦の通商破壊作戦が着々と功を奏し、イギリス本土の物資危機が頂點に達した時、時の首相ロイド・ジョージは「われらはすでに獨逸の死命を制してゐる」と道なことを言つてゐる。當時イギリスの軍事専門家は獨逸潜水艦の攻撃力を封する手段なしと政府に覺書を出し、ベスマン・ホルウエツチは對獨逸伏さへ主張して、イギリス政府の一角に動搖の色が顯著となつてゐた。ロイド・ジョージはその最大の危機の中で、平氣で勝利の確信を述べる謀略の腕を持つてゐたのである。

米英は殊更に軍需工業力の大を誇張して、獨逸のそれが不振であるが如く列國に印象せしめんとしてゐる。軍需工業力に於て過去二ケ年間、英米は確かに擴充に成功した。特にアメリカが一ヶ月百萬トンに近い船舶を建造し、七千臺の航空機を製作してゐる事實を見逃すことはできない。參戰當時三、四割方の不合格品を出した戦車も、今日ではシャーマン型の如き新鋭戦車を大量生産してゐるのをはじめ、兵器の改良も全般的に見るべきものがある。しかしアメリカの軍需工業力擴充は平和産業の軍

需轉換によつてもたらされたもので新たなる工場と機械と熟練工によつて得た結果ではない。世界の油田とゴムの半ば以上を使用する大自動車國、歐羅巴一流文明國民の三倍乃至四倍の一般財貨を消費した大對澤國が持つ平和産業の、人と機械のすべてを參戰二ケ年にして軍需に切換へた、アメリカの戰時體制強行は勿論輕視するを許されぬが、同時に轉換し得るもの一切を轉換しつくした以上、今後とも同一の擴充速度を期待することはできない。

軍需工業力擴充一本槍から、十三萬空軍、一千萬陸軍建設時代に入つて、アメリカにはすでに人的餘力が乏しい。今後の軍需生産力増加は、新たなる資源、新たなる工場、新たなる技師の開発、建設、養成を前提とする。一九四四年下半年期に入つてより部分的に生産指數減退さへ示してゐるのはそのためである。之に反し歐羅巴大陸を握る獨逸の軍需工業力は之からも擴大さるべき將來性を持つてゐる。

獨逸軍需工業力は、英米及びその術策に隨る歐羅巴の中小國聯合軍を相手に、戦ひ得る量を目標として擴大され、開戦後歐羅巴大陸の資源と技術と勞働力を握つた結果、その規模は英ソ兩國に對抗し得るものとなつた。しかしその後アメリカが正式に參戰した結果、獨逸は世界に於て最も富有であり、尨大な資源と勞働力を持つ、米英ソ三ヶ國と拮抗し得る軍需工業力の建設を必要とするに至つたので

ある

勿論イギリスの背後にアメリカの工業力があり、ルーズヴェルト一派が世界制覇の野望を持つ限り、アメリカがやがて樞軸の敵として登場するであらうことも豫想されたところである。しかしアメリカの平和産業軍需轉換が一國の内部的處理によつて進め得るに反して、獨逸は全歐羅巴の資源と人と機械を新に動員しなければならぬ丈に、アメリカと同一の速力をもつて軍需工業力の擴大を遂行することができなかつた。開戦當時米英佛三國の持つ航空機工業力を遙かに凌いだ獨逸が、チュニジア、シリアで米英聯合軍に量で對抗し得ず、獨逸本土に對する兇害の如き殺戮爆撃に對して、全速に價格なる報復手段に出で得なかつた理由はそこにある。

歐羅巴大陸の資源と機械と労働力を一丸とした場合米英ソ三國を遙かに壓倒し去る軍需工業力建設は可能である。獨逸は数字的可能を現實と化すべく、凡ゆる政治工作をつくし、特異の組織力を發揮し、科學者を總動員して當つた。一九四三年五月捕虜を合して千二百萬の外國人労働者が獨逸本國に於て働いてゐたといふ事實は、獨逸の目標とする全歐大陸兵器廠化の顯明な進行を證明するものであらう。問題は速度であり、速度に關する限りアメリカは確實に獨逸を追ひ抜いた。しかし追ひ抜いた瞬間にアメリカは平和産業の軍需轉換を一應終つて、その後の擴充に行懼みはじめた。シュベール獨

逸軍需相は「アメリカを目標とする生産力擴充は殆んど成し遂げた」と演説してゐる。即ち今度は獨逸がアメリカ生産力の伸び悩みに乗じて歩一歩アメリカを壓倒し、やがて米英ソ三國を追ひ越す順序となつて來たのだ。一九四四年一月末より展開されたロンドン爆撃はその一つの現はれであり、歐羅巴の軍需工業力は今後、愈々擴大さるべき資源と人と技術を三つともに豊富に握つてゐる。

米英が物質に於て獨逸を壓倒し得るは今を措いてない。この秋を利用し、東部戦線に於けるソ聯の總攻撃と呼應して、地中海より歐大陸南部に侵入し英本土より大爆撃機軍を飛ばし、同時に謀略攻勢で内部を擾亂一舉に樞軸を揉み潰さんと、全力を絞つて殺到して來た。大戦争に起伏する浪の頂上に立つ米英が、最低部にある獨逸を屠り去らんとしたのである。しかも米英の謀略に乗つてバドリオは軍需降伏し、イタリー軍の戦意喪失を觀てバルカンの匪賊は蠢動する。開戦以來最大の苦難に直面し、最大の危機に見舞はれたのは、一九四三年九、十月頃の獨逸であつた。

しかし獨逸はみごとに米英の攻勢に對處して、一九四四年淺春より、戦勢は明らかに獨逸の前途を明朗化しつつある。

スイスの有力紙ル・モア・シュイスは、苦境に立つて搖がぬ獨逸の戦意を讀へ「スターリンググラードよりバドリオの降伏まで、相ついだ不快なる報道を平然と受け入れ、冷靜事に處しつつ毅然として戦

力の擴充に力をつくす態度は何人をも感嘆せしめずにはおかぬ。獨逸のその士氣こそは最大の強味であり、やがて波の起伏に應じ、決定的な時機に於て、一大攻勢に出でるであらう」と論じてゐる。事實獨逸の今日は波の底より伸びあがらうとして居り、この守勢がやがての勝利への前提であり、戦力擴充のための離伏時代であることを、最もよく知つてゐるのは獨逸國民である。米英も歐大陸の兵器廠化を恐れ、獨逸將來の戦力擴充を警戒して、それ以前に目的を達成すべく、東南西より侵攻を圖ると同時に擾亂を強化し、一方謀略攻勢に出で、米英すでに勝てるが如く宣傳これ努めてゐる。しかもモーゲンソーが對伊作戰に悲鳴をあげると等しく、イギリス著名な軍事評論家リデルハートも「時は刻々米英に不利」と米英宣傳の虚を裏面より衝いてゐる。

時は米英にとつて斷じて味方ではない。すでにアメリカの参戦によつて、樞軸の敵として登場すべきものは悉く登場しつくした。米英と共に轉換すべき平和産業は悉く軍需に切り換へられた。残る者は歐羅巴大陸の新秩序建設工作進行と、大兵器廠化であり、一方日本の戦力擴充も東南亞細亞の巨大な資源を背景として今や一步を踏み出たのである。樞軸の勝利への途は現實の守勢より出發し、時と共に戦力を蓄積してやがて一大攻勢時代に入るのである。米英の焦慮はそこにあり、相つゞ神經的攻勢もその一點に出發する。

昭和十九年六月十日 初版印刷 (三〇〇〇部)
昭和十九年六月十五日 初版發行

(日本出版會承認)
530134號

米英の神經戰略

定價二圓五十錢
特別行爲用書十五錢
合計二圓六十五錢

著者 岩 滿 太 平

發行者 株式會社 歐亞通信社

印刷者 株式會社 同興舎

配給元 日本出版配給株式會社

發行所

東京都麹町區丸の内三丁目二番地
株式會社 歐亞通信社
會員番號一〇五五二五號
電話丸の内四六四四 五番

983
152

賣價(税込)¥2.65